

ぶどうの木

第 26 号



基督伝道隊

八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言	根本利三郎	1
主に出会って	折瀧 タケ	2
受洗に導かれて	花田 勉	3
自我を愛す	山本 潔子	6
主の御手に導かれて	藤掛美佐代	7
さんび	廣田 壽	26
「黙想」 朝三題	上野 米子	27
詩集「別れの日々」	伊規須太郎	28
夜の訪問者	石井勝三郎	31
「夜の訪問者」を読んで	金生 一郎	38
プラス思考でその日まで	貞 サユリ	41
オルガン秘話	貞 サユリ	41
我が思い出(八)	鈴木 一幹	44
無題	津留崎浩行	53
主の賜物	内田 喜代	55
鎮魂歌	正野 眞宏	56
信仰口上(魂シリーズ)	正野 眞宏	57

「弱り目にたたり目」	久保田宮子	61
骨折と緑内障	久保田宮子	61
四回目のOB会	久保田宮子	63
自分の信仰	緒方 昌隆	64
主人の趣味(生き甲斐)	緒方とみ子	65
永遠の課題(十人十色)	緒方とみ子	67
夫婦ゲンカ仲直り法	緒方とみ子	69
八幡前田教会年表		70

巻 頭 言

榎 本 利 三 郎

今年は地球の温暖化の影響を受けたのでしょうか？気候も例年になく、変調のようでした。ぶどうの木二十六号も漸く皆様の御手元へ、届けることになりました。

此の年も色々な事がありました。気温の変化によって、この年は果物の熟成にも、様々な変化があったと聞いています。私共の教会も、主が完熟した者として多くの兄妹を聖国へ召して下さいました。

水村耕一兄、石丸勇兄、花田文字姉、丸山雪夫兄、三好ツル姉、小松清次兄、渡慶次政夫兄、林正二郎兄。
主イエスの血に贖われ、主の御恩寵に育まれた兄弟姉妹が御用を終えて、主の御元へ帰られました。
私共もやがて御用を終えて、聖徒達と共に聖国の礼拝に加えて頂く日を望んで参りましょう。

一九九八年一二月

(黙示録 七章 九―一七節)



主に出会って

折瀧 タケ

(大濠)

神様のご愛とあわれみと皆様のお祈りのおかげで、今日、洗礼を受けることになりました。ありがとうございます。

私は、神様を恐れず、人を恐れ、自分勝手な生活を五十年も送って参りました。主人を亡くしましてから、神様は一つ一つの事柄を通して、丁寧にご自分の存在を私に知らせて下さいました。主人の遺体に付き添ってわが家へ帰宅する病院の廊下を歩いているときに、「わたしたちは、見えるものにはなく、見えないものに目を注ぐ」というお言葉が頭をかすめました。主人の見えるところだけに気を取られて、毎日を繰り返しておりましたので、目に見えない部分のことなど考えもしなかったのです。

主人がわたしにのこしてくれました言葉は、「教会へ行くと大丈夫だから」という言葉でした。また、主人は、体の自由がきく時に、私に紙とペンを用意するように、そして、手の届くところに置いておくように申しつけておりました。亡くなる日の夜中、紙とペンをとり、何か字を書きました。私には、主人が何と書いたのか読めませんでした。婦長さんや

看護婦さんにも見てもらいましたがわかりませんでした。それから毎日そのことが気にかかっておりまして、一週間くらい過ぎたある日、讚美歌二九八番だということが分かりました。私は一番大事な時に、一番大切なことに気づかず、申し訳ないと悔やみ続けました。

主人の命が限りあると医者知らされた日から、不眠症になっておりましたし、主人の死で自律神経失調症もひどくなりました。私自身、手術を受けることが決まっていた体でした。自分の意思ではどうすることも出来ないことを経験しましたことは、鈍感な私への神様の恵みだったのです。予定どおり手術を受け、術後も意に反して、体の調子は悪く、自分であって自分でないような毎日でした。

そんなとき、六月一日に長女が二ヵ月半も早く、早産をしてしまいました。知らせを受けた私は、フラフラしながら、次女に付き添ってらって、川崎の病院へ駆けつけました。娘の無事な姿を見て、入院に必要なものを買い揃えて、長女の不安な気持ちを考える余裕もなく、帰途につきました。赤ちゃんは千グラムで、まだ肺臓が出来上がってなく、保育器のある病院に着くまでに時間が掛かりすぎ、命がいつ消えるか分からないということでした。その時、「教会に行けば心配ない、大丈夫」という主人の言葉を思い出し、教会に行くようになりました。

それから、私の心は、すこしづつ落ちつきはじめ、色々な事が考えられるようになりました。そして、祈ることも！

イザヤ書三十章十五節「あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」とのお言葉を頼みとして、ただ祈り続けました。

私は主人のことをお父さんと呼んでおりましたので、「お父さん、ごめんさい、よろしくお願いします」と毎日お祈りしておりましたが、いつの間にか、「天のお父さま」になりました。神様は、神様よりも人を恐れる者だった私を、神様を恐れる者、神を知る者、お言葉を聞くことの出来る者へとしてくださいました。

受洗が決まってから、牧師先生より、「わたしは主である。わたしのほかに神はない、ひとりもない。あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたを強くする。これは日が出る方から、また西の方から、人々がわたしのほかに神のないことを知るようになるためである。わたしは主である。わたしのほかに神はない。わたしは光をつくり、また暗きを創造し、繁栄をつくり、またわざわいを創造する。わたしは主である、すべてこれらの事をなす者である」（イザヤ書四十五章一七節）のお言葉を頂きました。

神様は罪人の私を追求することをされず、かえって、イエス様によって許してください、贖ってくださいました。罪な

きイエス・キリストの十字架の贖いによって許されました私は、死に至まで従順であられたイエス・キリストの御足のあとにお従いしていきます。イエス様が備えてくださった道を、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事に感謝しなさい」のお言葉と共に、ゴールを目指して歩いて行きます。神様、わたしをイエス・キリストの教会の一員としてください、ありがとうございます。感謝いたします。これからも、お祈りをお願いいたします。

（一九九八年五月二四日）

受洗に導かれて

花田 勉

（大濠）

はじめに、今日このように前に立って信仰告白をさせていただくことができることを心より感謝しています。

町に出れば容姿のいい男性、きれいな女性、心の優しいボランティアの人、知性ある人など、私のようなものより、素晴らしい人が大勢います。しかし、主は愚かで、弱く、醜

い、肉の欲に惹かれるような罪人のわたしを見守り、贖ってくださいました。それも三十一年間の長い間です。もし私が主の立場でしたら、十日もしないうちに愛想をつかして、見捨てると思います。

サムエル記上一六章七節に神様が言われました。

「わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る。」

また、ルカによる福音書五章三二節にイエス様は言われま

す。「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と。なんと感謝なことでしょうか。

生まれた時から、ずっと教会に導かれてきました。そのためか、物心ついた時には、神様はいらっしゃるし、イエス様が今も生きていらっしゃるということは信じていました。それは私をいつも見守ってくださっているからだと思います。しかし、私は重大な過ちをおかしていました。それは、神様、イエス様を魔法のランプだと思っていたのです。普段はえらぶり、自分ではどうしようもなくなくなると、お祈りをします。自分のやりたいことをやり、どうにもならなくなると主に悔やむ。まったく恥ずべき行爲です。

私は教会に来ることをあまり欠かしたことはありません。

友達と朝まで遊んでも、礼拝には来ていました。しかし、それは来ているだけのことでした。聖書を読んでも、神様の声を聞かず、讚美歌を歌っても喜びがありませんでした。そこには真理を、神様を畏れず、イエス様の道にも歩んでいなかったのです。

ヨハネによる福音書四章二四節にはイエス様が言われます。

「神は霊であるから、礼拝する者も、霊とまことをもって礼拝すべきである」と。しかし、そのことが分かりませんでした。そのためか、二十歳を過ぎるころ、自分の自我がますます膨れ上がって、この世のこと、友達、酒、肉の欲望を追求するようになり、教会に来ることも少なくなりました。遊びまわりました。

伝道の書に、「若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたのおもむくまま、あなた目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ」（新改訳一章九節）とあります。ほんとうにそうでした。私は見ないで信じる者ではなく、見て信じる愚か者です。同じく伝道の書一二章一三節（新改訳）に、「神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」とあります。二十歳を過ぎた頃、主に立ち返りたいと思い、礼拝に出るようになりました。しかし、それでも喜びがありませんでした。

二十七歳になり、またもや自分の自我が膨らみ、親に反抗的になり、いよいよもって家を飛び出しました。自分は人に頼らなくても生きていける、と傲慢な思いがそうさせたにちがいありません。しかし、すぐに自分は取るに足らない人間だということに気がつきました。あまりにも計画性がなく、幼稚で駄目な自分。しかし、主はこんな私をお見捨てにならず、住むべき部屋を与え、仕事を与えてくださいました。それだけではなく、主はみ力をあらわし、み業をなして、もとの家に帰されました。主は万事を益にしてくださいだったので。

しばらくすると、自分のことについていろいろ考えるようになりました。自分自身では何度となくイエス様に悔い改めて、新しくなろうと努力しましたが、まったく効果がありません。聖書には、どんな時にも喜びなさいと言われているのですが、それができません。主の道を求めるようになりたて私には力がない。私に出来ることは祈るだけ、そうやって祈り続けました。

あるとき、ある人とお話ししていたとき、その方が突然「イエス様をどう思われますか」といわれたのです。私はその問いに答えることができませんでした。（私はいつもイエス様と呼びかけていながら答えることができない）。家に帰り、聖書を夢中で読みました。今までも読んでいたのです

が、今回は心を尽くし、思いを尽くして読みました。それが私の間違いに気がつきました。イエス様が私の救い主であり、自分の力では何も出来ないことを。素晴らしい喜びと感謝でいっぱいになりました。それですぐに洗礼を受けさせてくださいと、先生に申し出ました。神様は生きておられる、イエス様は今も生きていらっしゃるということは、以前から信じていました。洗礼を受けた後、私は罪を犯すだろうし、その時、神様から醜い罰を受けるに違いないという恐れがありました。しかし、先生は、イエス様はあなたを愛していらっしゃるし、神様もあなたを子として認めてくださるのに、そんなことをするはずはない、と話してくださいました。ヨハネによる福音書三章一六節に「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださいました。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」と約束されています。感謝です。今は感謝と喜びに満ち溢れています。毎日が今までとは違います。しかし、やっと光の子供になったばかりです。これから、自分の罪の雑草が生えてきます。「主よ、どうかいつも私の祈りを聞いて、私の罪の雑草を取り除いてください」と、祈り続けてまいります。神の子にしてくださいました神様、愛をもって守り、導いてくださった主イエスさまに感謝します。

主われを愛す

山本 潔子

(前田)

神様の豊かなお恵みを感謝致します。

私は生まれる前、母のおなかにいる時から教会へ行き、日々祈りの中に生かされてきました。

私は福岡県北九州市で生まれ、実家は私で四代目になるクリスチャンホームです。実家の隣が八幡前田教会だったので、私にとって神様や教会はあたりまえの存在でしたし、牧師先生はおじいちゃんのような存在でした。

三才になると母の付き添いなしで日曜学校へ通うようになります、初めて覚えた歌が賛美歌四六一番の「主われを愛す」でした。当時は歌詞の意味などわかる訳もなく、「シユワレオアイス」はアイスクリームのことだと思っていましたし、「シユワツ、ヨケレバ」と全く意味をなさない音の羅列でした。それでも、いすの上に立って歌うと祖母が拍手をしてくれましたので、喜んでよく歌っていました。

何をするにもお祈りをしてからという環境で育ち、病気や困ったことがあると自分のお祈りだけでは心もとなく、両親や祖母に「お祈りしててね」と頼むと勇氣百倍、安心できま

した。

高校二年の時に牧師先生から受洗を勧められ、私が生きていく上で神様なしの生活は考えられないのだから、と決心をしました。八幡前田教会では洗礼式はイースターの頃、車で二〇分程の川の上流で早朝に行なわれます。胸のあたりまで水につかって仰向けに倒れ、その瞬間、両脇から牧師先生方が引き起こして下さいます。古い自分は死んで新しく生まれ変わるので、受洗によって何か劇的な変化があるかと期待しましたが、何も起きませんでした。ただ、それまで両親や祖母の信仰に頼っていた私が、神様の前に私自身の信仰を問われるようで、身の引き締まる思いがしました。

翌年、大学進学の為上京し、親元から離れた生活が始まりました。いくつかの教会へ行ってみました、なかなかよその教会にはなじみせず、後ろめたく思いながらも教会から遠ざかってしまいました。そんな時、ふと「主われを愛す」の讚美歌が浮かんできました。口ずさんでみると、今まで考えもしなかった言葉の意味が迫ってきて、涙ができました。神様が生かして下さっているのに自分ひとりでは何をしようとしたのか、こんな私を神様は愛をもって見守っていて下さったのだと。神様の愛に気づいていないだけでした。

弱い私ですが、事あるごとに御聖霊の働きに助けられています。やっと信仰の芽が育ち始めたようです。

主の御手に導かれて

(九十年の生涯を振り返って)

藤掛 美佐代

(大濠)

「あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴を思いみよ。」イザヤ書五一章一節

【家族について】

私の郷里は、今では安心院(あじむ)町佐田村ですが、娘のころは大分県宇佐郡佐田村字山蔵というところでした。安心院町になったのはそれほど古くはありません。

私の両親はクリスチャンではなく、宗教は仏教の浄土真宗でした。私の曾祖父の兄がお寺の住職で、その方は四日市の近くに別府と書いて「びゅう」と読む所があって、その豊瑞寺というお寺に務めていました。その息子も速見郡の山浦村の豊瑞寺で後をついでいました。ですが、私の祖父や父は住職ではありません。父は日田の農林学校を卒業して、県の農事試験所に勤めていました。それから長洲に女子だけに養蚕を教える学校があって、そこにも勤めていたときがあります。閑院の宮様が学校の視察にみえた時に写した、記念写真

に父も写っていました。それを覚えています。学校を止めてからは、役場で働きました。

家では養蚕を教えていました。金属の枠に和紙を張ったものに、交尾を終わった雌の蛾を置いて、卵を和紙に産みつけさせ、繭になると糸に紡ぎます。大きなお釜で繭を茹でて、真綿にしたり、絹糸にしたり、幾つかの大きな糸巻に、絹糸を巻き取ることを教えていました。子供のころは、養蚕が盛んで、桑畑が山の裾にずっといっぱいありました。桑の葉を大勢で刈り取ったり、摘んできたり、父が丈夫な間、教えていたのを覚えています。父は石川忠次郎、母は「咲」と言います。父は四十七歳で亡くなり、母は五十四歳で亡くなりました。弟が父にずっと聖書のお話をしていたと思いますが、父が召される時には亡骸が横たわっているその上に聖書が開いて乗せてある写真があります。

海軍で佐世保に居りました叔父が退役で家に帰りました時に、京都の叔父が母に体を休めに京都に出てきなさいと勧めました。弟や妹を連れてしばらく京都に休みに出てきました。祖父母の世話は退役して帰っています叔父が見てくれました。二年ぐらい居りましたか、京都に居ります間、ずっと伝道館に出席していました。洗礼は受けませんでした。が、神様のお恵みをいただいで、生活が変えられたと思います。郵便局におります妹も教会学校で学んでいました。私が佐伯

に導かれたことで、家族がみな主の恵みにあずかりました。

私は六人兄弟の長女で一番上です。弟三人、妹二人おりました。弟で長男は忠記(ただのり)と申します。彼は明治学院の神学部に行きました。卒業後は豊後高田の教会でご用をされている時に、戦地への招集を受け、中支に派遣され、終戦にて佐世保まで帰還し、佐世保の病院で亡くなりました。次の弟次男は忠敏(ただとし)といひます。小学高等科を卒業して、大分師範に入学して、そこを卒業しました。父の妹の婿、叔父さんになる人が、満洲で満鉄の燃料のコークスを納めていましたので、そこに手伝いに行き、やがて戦争にとられて戦死しました。妹は仏木七日代です。私共と一緒に福岡で生活していましたが、病を得て、大濠公園教会の先生、皆様の篤いお祈りのうちに、平成三年七月、亡くなりました。次の弟、三男は忠法(ただのり)といひます。彼は佐田郵便局の叔父の所で働いていましたが、海軍に応召し激戦地ラバウルに派遣され、終戦となり、生命からがら帰って来ました。が、当時のマラリヤにやられて、実家にて亡くなりました。末の妹の佐智代は佐田郵便局の叔父の家のあとを継いで、現在も同地にて活躍中です。

【京都の産婆学校へ】

私が京都の佐伯の学校に行くことになったのは、私が実科

女学校という裁縫などを教える学校を卒業して、これからどうしようかと母と話していた時に、母の弟の親逸(ちかいつ)という京都で歯科医をしている叔父が、丁度、家に来ていまして、私に京都に出てきなさい、なんとかなるだろうから、と勧めてくれたのです。それで、私も叔父の所の手伝いでもいいわ、と思いました。

父の兄弟は十二人でしたが、双子の兄弟が小さいとき川で遊んでいて溺れて死んでしまつて、十人になっていました。叔父さん達男の子は農学校や中学校を出て、叔母さん方女の子は女学校をでて、その間、長男であった父が兄弟の面倒を見ていました。学校へ行かしたり、結婚をさせたりで、大変でしたと思ひます。私の子供のころは、叔父や叔母たちの古着を再生して、縫いかえたりして着ていました。昔の事だから。生活が大変だったろうと思ひます。年齢も私たちと近くて、郵便局の叔母とは四歳しか違ひませんでした。ですから、叔父・叔母といつても、兄弟のようなものでした。学校も小学校なんかは一緒でした。着物も袴も模様は皆同じでした。髪もどれだけ叔母さんから、お遊びでいじられたか分かりません。母は小柄で体も弱い人でした。入院退院を繰り返すような状態でした。

京都の叔父の話にのつて、母もそうするようにと申しますので、連れていってもらいました。京都駅に着くと、叔父が

電話をしていました。どなたに電話をしているのかな、と思いました。そしたら、宇佐中学でのお友達で京都大学へいらった方に電話していました。そして夕食を一緒にいたしました。その時叔父が姪である私を紹介して、どこかいい仕事がないだろうか、というようなことを話しました。叔父は京都大学の看護学院でも、と思っただけです。けれども、その先生は、糸長さんだったかと思いますが、京都大学もいいけど、もう一ついい所を教えてあげる、といって、佐伯の産婆学校を教えてくれたのです。その頃、佐伯先生の御次男の信雄先生が京都大学の解剖学教室におられました。すぐそこで受験の準備をして、受験しました。お陰で合格することができました。これは誠に神様のお導きであったと思います。もし、佐伯に行かなかったら、私の人生は変わっていたでしょう。主の救いに与かることもなかったでしょう。

【キリスト教とのかかわり】

父は徳富蘇峰（猪一郎）や徳富蘆花（健次郎）とも面識がありました。徳富さん方々はお二方共クリスチャンで、お兄様は新島襄先生から洗礼を受けておられ、弟さんは熊本メソジスト教会で洗礼を受け、愛媛県の今治で伝道しておられたこともある方です。そんな関係で、父は佐伯の学校に入ることも躊躇無く許してくれましたし、洗礼を受けるときも、

信教の自由は認めます、といっただけに許してくれました。そういうわけで、私が神様の救いを頂いて、信仰生活を送らせて頂けるようになりました。宇佐中学に在学していた弟も、中学校におられたクリスチャンの先生などからいろんな影響を受けていたと思います。

私が佐伯の学校を卒業した時、一週間ばかり郷里に帰りました。その時、弟が中学に通う間お世話になった宇佐で医院をしていた叔母を訪ねました。円通寺にも叔母がおりました。私が佐伯の学校に入学してから、何時も卒業後の就職を世話しようと、心掛けてくれていたのですが、私が全部断っていましたので、お詫びかたがたお礼に伺ったのです。弟も一緒に行きました。その途中で、弟が「姉ちゃん、僕、明治学院の神学部に進むことにしたよ」と打ち明けてくれました。それはいいことだね、とわたしも喜びました。両親もそれを許してくれました。弟は特別に誰かに導かれたということは無かったです。吉良先生との交わりはあったようですよ。吉良先生が田舎の家にもお出でくださったこともあったようですよ。弟が信仰に導かれて神学校に行くようになるなどとは、想像もしませんでした。私が佐伯に導かれ、弟もそれによって、信仰に関心を持ち、学校の先生や吉良先生との交わりを通して、また私の京都での生活ぶりなどをみて、救いへと導かれたものと思います。弟は剣道で胸を打ち、体を

悪くしていました。



【信仰に導かれて】

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。」ヨハネ 一五章一六節

京都の学校に入学して、人体についての勉強はもちろんでしたが、キリスト教の集会がありました。ナザレン教会の山崎先生が来られてお話しをしてくださっていました。しかし、長くは続きませんでした。入学した大正十三年の七月に寄宿舎の隣にあった空き地で柘植先生の天幕伝道が一週間おこなわれました。私はまだ叔父の家から通っていましたので、天幕伝道には毎日出ることはありませんで、一日だけ出させられました。お説教が終わった時、柘植先生が救いに預かりたい方は前にでなさい、と仰って、前にでました。その時に、マタイによる福音書十一章二十八節から三十節のお言

葉で祈って下さいました。信仰の確信を与えられました。

天幕伝道が終わって、その空き地に教会堂が建てられました。そして、西条先生が其処に残って下さいました。佐伯病院の表側は教室ですが、裏側には病室がずっと並んでいました。その病室の一号の部屋に西条先生がお泊まりして、生徒の信仰を導いて下さいました。十一月に会堂が出来て、京都伝道館の先生とられました。教会が出来るまでは、後藤先生といわれる佐伯先生の叔母様が舎監をしておられましたが、会堂が出来、牧師館もその横に出来て西条先生ご夫妻と献身修養生が住まわれ、舎監も大西先生になりました。後藤先生は柳の番場にあった佐伯病院に移られました。大西先生がしっかり導いて下さいました。

修養生の宿舎は下立売りにあった佐伯先生のアパートに女子の修養生が住み、下鴨に佐伯先生の別荘があり、男子の修養生はそこに住んでいました。その頃の京都の教会には修養生が沢山いました。坊向先生、小林先生、大野先生など五、六人ほどいました。その外、佐伯先生のところの運転手さんや働いていた人達が皆献身いたしました。女子は大西先生、藤村忠子奥様小林秀子先生や、後に伝道者の奥様になられた方々が沢山いらっしゃいました。

学校の生活も、佐伯先生が集会には欠かさず出席するようにと勧められて、私どもは礼拝をはじめ、その他の祈禱会や

折々に行われる修養会、聖会などにも出席しました。また、教会のお掃除やらも、私たち生徒もご一緒にいたしました。ですから、生活が献身者の方々とおなじようなものでした。

教会が出来てからは、佐伯の生徒たちは全員礼拝に出ていました。講壇の前にあった座布団は生徒たちばかりでした。私の居ましたあいだでも、何度か柘植先生がお見えになり、聖会がありました。また、何人かの生徒たちは落合での聖会にも出掛けていきました。私も夏休みになると、郷里に帰りたいなと思いましたが、舎監の先生が「郷里に帰るより聖会に行きなさい」と勧められました。信州の御聖会にも、連れて行って頂きました。

入学した年の大正十三年の十二月十三日に洗礼を受けました。桑山梅子さんのあかしに「大正十三年に京都において天幕伝道が開かれました。落合の皆さんは命懸けで祈っておいでなさいました。その京都の天幕の後に教会が建ちました。

私たち家族はその天幕伝道ですぐ後に京都に親戚がありましたので、こちらへ引っ越してまいりました」とあります。桑山さんは学校とは関係がありませんが、教会のかたで、熱心に祈り、導いて下さいました。この方は大正十二年の関東大震災の後の天幕伝道で救われたそうです。この年に洗礼を受けた方は沢山おられました。その中には、暴力団ですかヤクザだった方が悔い改めて救われた人もいました。主人もその

時一緒に洗礼をうけましたが、まだ表具屋の「芝田堂」に奉公していたときでした。

【丹後へ派遣】

「神よ、あなたのもろもろのみ思いは、なんとわたしに尊いことでしょう。その全体なんと広大なことでしょう。」

詩篇一三九篇一七節

佐伯病院に桜井病院の奥様（眼科女医）が実地勉強に來られたようです。その時に、卒業生を一人桜井病院へ寄越してくださいと、依頼されたそうです。ですから、卒業式が終わってから、舎監の大西先生が丹後の網野町の桜井医院に行くようにと言われました。そのころは、自分の意見はいわれません。ただ、先生の言われるところに絶対服従でした。佐伯先生とのお話で行くようにといわれました。卒業してすぐ、一度郷里に帰りました。両親と相談して、そう言うことだったら、いつてらっしゃいと言うことになりました。母もあまり知らない所へは遣りたくないようでしたが、先生の仰

るようにお従いして、四月になってからだったでしょうか、丹後へ参りました。大西先生が私が郷里から京都駅に着くのを迎えてくださって、二条駅から山陰線が出ていましたので、そこまで送ってくださいました。荷物などもすべて大西先生が送りだして下さいました。

佐伯の学校は修業年限は二年でしたから、大正十五年に卒業しました。卒業して、郷里に一週間位いましたかね、すぐに丹後の桜井病院へいきました。母は心配になっていたのでしょうか、先生の所にしょっちゅう手紙がきていました。よろしくたのむと。先生が手紙を読んでは、「あなたのお母さんは明治時代の教育をちゃんと受けた人やな」とおっしゃっていたことが耳に残っています。

桜井病院にいるときに印象に残っているのは、同志社を出て、丹後の縮緬工場に部屋を借りて伝道していた若い人が、信仰に行き詰まったのでしょいか、昇汞水を飲んで自殺をはかった人がいました。先生は木炭を細かく砕いて飲ませなされたことを覚えています。胃洗浄いたしました。手を尽くして治療しましたが、病院へ運ばれてくるまでに時間が経っていてもう毒が体に回っていたのでしょいか、一週間程で亡くなりました。佐伯先生はこの事を新聞の記事でお知りになって、どんな状態かと葉書で様子を尋ねて下さいました。その外にも、心配して下さいってたびたび葉書を下さって励ま

して下さいました。遣わされる時のお言葉は詩篇の四十六篇で、大西先生が与えて下さいました。それが大きな力でした。病院では毎日毎日学校で学んだ教科書やノートに聖書を手放せない状態で、先生が指示されることをご本を見ながら、勉強しながら、やっていました。みことばに立って、主に守られてきました。信仰も浅くて、初めての事ばかりですから、大西先生や佐伯先生、奥様、教会の皆さんがお祈りして下さったのだと思います。

【神様のご計画】

昭和二年に母から手紙が来まして、父が京阪神に用事があって役場の方と出掛けるから、あなたに会いたいのので、京都まで出てくるようにと、言ってきました。一週間も経たないうちに、京都から電報で「会いに来い」と言ってきましたので、院長先生にお話しましたら、「そりゃ、おとうさんに来てもらえ。私もあなたのお父さんにお会いしたい」とのことです、私は父に「イケヌ、オイデヲコウ」と電報を打ちました。そしたら、また父から「イケヌ、ゼヒアイニコイ」といってきました。先生は困ったな、もう一度電報を打つようにと言われました。ところが父から三度目の電報で、是非会いにこいと返事でした。先生もそれじゃ行くかな、と言われ、それから用意してすぐ立って行きました。

父が二条駅に迎えにきていました。私の佐伯のお友達で、とても親しく、学校の勉強も、教会での生活も、一緒に過ごした方が、七条駅の近くで助産婦として開業していました。

大綱さんという方で、いつも折っていてくれましたから、さっそくその方を訪ねて行きました。そちらに着いて、挨拶やらお祈りをしかけた時に、ドカンと大きく揺れました。棚の物やらが落ちてきました。地震だったのです。慌てて飛び出しました。父も一緒でした。そのうち号外が出まして、丹後の網野町が中心だったことを知りました。後に佐伯先生と救護班で行きました時、ほとんどの家が全滅していましたが、大きな丹後縮緬の機織り工場が潰れていました。神様はこの為に私を京都に連れだされたのだと思いました。父も幾らか神様のことを思っ、心うたれたようでした。父はそこから母に電報で美佐代も共に無事と知らせ、私と別れて郷里に帰りました。それから、教会の先生方が心配して祈っていて下さるからと思っ、私だけ急いで教会へ参りました。教会の玄関に来ました時、大西先生が私宛に電報を打とうとして、出掛けるところだったのです。丹後にいるとばかり思っていたので、皆さんが大変びっくりして、また大喜びしてくれました。涙流して感謝しました。そこには先生方をはじめ献身者の方々も一緒にいました。また結婚前の藤掛さんもいました。それから、下鴨の佐伯先生の別荘に大西先生と御接

拶に出掛けて、感謝のお祈りをさせていただきました。佐伯奥様がこれは神様の御業だと喜んで下さいました。主を崇めました。

【丹後地震の救援】

室町の教会へ戻りますと、佐伯先生が、丹後には卒業生が沢山いるから、救護班を作って出掛けようと言うことになり、私の他に四、五名の方達と一緒に、佐伯先生の末の息子さんの睦男さんが車を運転して出掛けました。途中の道が寸断されていて、大変難儀しました。宿舎は大きな農家で、囲炉裏の煤で黒光りしていました。大きな材木を使っていたからでしょうか、その家は被害がなかったようです。大きな囲炉裏では絶えず大きな木が二三本燃やされていました。佐伯先生が着いてから、「贅沢だな、こんな贅沢はここでしかないよ」と言っていました。木をこんなに燃やしていることが町中では出来ないからでしょう。囲炉裏が懐かしかつたのでしょう。先生はお元気で、小さなテントに避難している負傷者たちを、懇ろによくお世話してくださいました。卒業生の為ばかりではなく、その周囲の町の人達のためにもよくなさいました。普段恵まれた生活をしておられた先生が、自ら草のうえに寝かされている人のところでも、どこへでも入って行かれて手当てをなさいました。私には「はや

く、桜井病院へ行きなさい」と勧めてくれましたので、病院へ参りましたら、本宅も病院もベシヤンこになっていました。奥様とお嬢さんが助かっていましたが、先生と息子さんは亡くなっていました。病室には腹水の溜まったおばあちゃんがいきましたが、息子さんが若い方だったので、助けられたのでしょうか。いませんでした。隣の病室に若い御夫婦がおられました。ご主人が動けなくて入院していたのですが、お二人とも亡くなりました。まだ小学校三年を頭に三人のお子さんを残されました。

ここは医院でしたから、病室は五、六室しかありません。廊下が真ん中で、両側に病室のほかに診察室、消毒室、手術室など色々ありました。一階は先生の書齋となっていました。一緒に薬局で薬を調剤していた方も、お手伝いの方ももうだれもいらっしゃいませんでした。その方々は助かっていました。奥様が、今はこんなふうだが、これを整理したらまた来て頂戴よ、と言われました。はい、と返事はして帰りましたが、教会の西条先生がもう行かなくていいと止めて下さいました。私の信仰を心配して下さいましょう。丹後には教会がありませんでしたから。桜井病院にいる一年半程の間は自分で聖書を拝読したり、説教ノートを読んでおりました。大きな声を出してお祈りもできませんから。すればいいのでしょうか、そこまで勇気がありませんでした。救護班は

一週間ほどで帰りました。でも、そのころ薬局で一緒に働いていた方が、私の結婚する頃でしたか、京都に出てこられて佐伯の学校に入りました。



【結婚に至まで】

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。」 創世記 一二章一節

京都に帰りまして、柳の馬場のほうの病院で御用するようにといわれました。一階と二階に病室が五つと舎監の後藤先生と生徒の部屋、卒業生の私と大橋さんと吉原さんという四国からいらした方、三島先生ともう一人全部の指導される古い卒業生の先生、卒業生の実習に出ていかれる方が五、六人居ました。在校生もいましたし、義男先生と佐伯先生が交代で毎日診察に来られました。信男先生は京都大学の解剖学教

室にかよっておられました。後に、大学をやめて柳の馬場の病院にずっとお勤めでした。初めは二階の病室を二つ使って住まいとしていましたが、病院のそばにあった土地に大きな家を建てられて住まわれました。

こうして、丹後から帰って昭和四年の四月三日に結婚しましたが、それまで柳の馬場の病院にいました。信男先生は全てのことを知っておられましたので、結婚するかと言われました。

ある日、教会へ参りましたら、西条先生が「藤掛さんの所を知っているか」と尋ねられました。教会からほんの直ぐ近くでしたが私は知りませんでした。教会は中長者町、藤掛は下長者町の路地の中になりました。「藤掛さんのところにあるた行ってみんか」といわれ、なんのことかなとおもいました。場所を教えてもらって出掛けました。その頃は、表装は止めて、製本の仕事をしていました。痔が悪く出血するものですから、しかも脱腸がありましたので、座ってする仕事である表装は無理だからと製本に変わって、独りでやっています。柘植先生の『ペンテコステ前後』や聖書の製本をやっていました。

独りで独立して、製本の仕事をやっていました。が、まだあまり日は経っていないのでしょう。その頃主人は献身する決心をしていたのではないしょうか。それで、西条先生

は私がついていけるかどうかを知りたかったのでしょう。先生と主人の間ではお話が出来ていたのでしょうか。藤掛がそのとき「あなた、来てくれるか」と聞かれ、わたしは「はい」と返事をしました。そして、「ぼくは献身を願っているが、ついてくるか」といわれました。それにもただ「はい」と返事して、それだけでした。教会に戻って先生に報告しましたら、「ああ、そうか」といわれ、後は結婚の話が進んでいきました。話があって結婚するまでは、あまり時間はありませんでした。主人は「ぼくもあかしを書くから、あなたもあかしを書きなさい」と言われて、私の過ぎ越しのことを書きました。主人のも書いて貰いました。それを通して、藤掛も決心がついたのでしょう。私も西条先生がいわれたのですから、何にも言うことはありません。お友達が、「藤掛さんのような弱い人のところに、あなたがいけるか」と言われました。それほど体が弱いことが評判だったようです。

京都の教会で結婚式をいたしました。住まいは下長者町の五、六軒続いた路地にある家でした。そこは製本の仕事場と生活の場が一緒でした。土間を板張りにして、いろんな機械が置いていました。紙を切断する機械は大きなものでした。その頃、既に藤村勇先生の弟さんの登さんが一緒に生活していました。天井裏に天窓をこしらえて、小さな部屋を造り、梯子で昇り降りしていました。母が「あなた、やっていける

のか」と心配していました。

大体結婚の話が決まりました時、藤掛の父と歯医者私の叔父とが柳の馬場におられた舎監の後藤先生の部屋において、三人でなにか話し合ってくださいようです。「あなたお茶を持っておいで」と後藤先生に言われて、お茶をもって行っただけで、わたしはそこにはいませんでした。そこで話が全部出来たのでしよう。それまでに藤掛のお父さんが折々に教会の窓から、私たちが寄宿舎から学校へ行ったり来たりするのを見ていました。私たちは、お髭の白いおじいさんがおいでるな、と思っただけでしたが、それが藤掛の父上だったのです。

結婚の話がある前でしたが、『ペンテコステ前後』を製本している時、ページを合わせる作業がありますが、私と他に五人程、滋賀で伝道しておられる饗庭セツさん（一級下でした）、辻井さん、川村さん等に西条先生が手伝いにいかせました。三時間位居たでしょうか、そこに藤掛の妹さんも手伝いに来ていました。結婚した後聞いたことですが、妹の八寿子さんが「あの人がいいよ」と言ったよとのことでした。だから、手伝いに行ったとき、誰とは決めないで候補者を送っていたのでしよう。後で考えると不思議なことでした。

結婚式は教会でしたが、披露宴は京都市庁舎の食堂でいたしました。市庁舎は路地を出たすぐの所でしたから。室

町の烏丸ですから、御所もすぐそばでした。邦次は遊ぶのも御所の庭でした。ある時、母が御所で邦次を遊ばせていた時に、後ろから来た若い人の自転車につまづいて転んで、顎を打って、歯根骨まで骨折しました。邦次には怪我はありませんでした。佐伯先生に見てもらいましたが、此処ではどうにもできないから、府立病院へ行くようにといわれて行きましたが、そこでもダメで義男先生のお友達の歯医者さんと叔父と二人で手術しました。

結婚しまして、長男の邦次が三才まで、四、五年居りましたか、そんなに長くではありません。その間は製本の仕事をしていました。わたしは病院の仕事は止めて、家で主人の仕事を手伝い、もっぱら家事をしていました。藤村の登さんも私どもが主人の胃潰瘍で京都を離れるまで一緒に仕事をしてくれました。主人が体を壊して製本の仕事が出来なくなりましたので、佐伯先生の勧めもあって、藤掛の郷里の岐阜・兼山に移って静養することにしました。京都の家をたたみ、わたしどもは岐阜へ、藤村登さんは東京へとそれぞれ別れました。登さんは東京で役所に勤め、そこで製本の仕事をされ、結婚もなさったようです。

【岐阜の郷里にて】

「恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤに行け
そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい。」

マタイ 二八章二十節

岐阜に来て半年ぐらい休養しましたが、体調が良くな
って、また表装の仕事を始めました。松岡映丘さんという画
家が主人のお友達の別荘に避暑に来ておられました。そこで
絵を描いていらっしゃたのです。「わしは、今日は松岡先生
のところへ墨すりにいくよ」といってはよく出掛けていまし
た。それから、先生の描いたものを表装したり、村の人達や
隣村の大きなお家の屏風などの修理や表装をしていました。
それこそ六畳二間の狭い部屋でしたが、出来上がったものを
壁に掛けて、くるんと横になって「ああ、できたなあ」とい
っては眺めていました。そのころはたいぶ体力も出来てきて
いました。周りが桑畑でしたが、その一部、どのくらいでし
たか、三十坪くらいでしたか、地主の方が貸してくださいっ
て、野菜を作ったりして体を養っていました。

岐阜に参りました頃、たえ子が生まれ、生活も大変でし
た。藤掛のお母様が「あなたも資格をもっているのだから、
少し働いてみたらどうか」いわれました。ご近所にも古くか

ら助産婦をしておられる方が二、三人いらっしゃいましたが、
思い切って働くようにしました。古くからの助産婦さんは大
きな家の方によく呼ばれますが、わたしを呼んで下さるのは
農家や小さいお家の方ばかりでしたが、それでもお野菜やお
米などを頂いて助かりました。その頃は十円頂いたら大変な
ことでした。主人も半年ほど休んだだけで、お仕事が出来て
いましたから、どれほどの役に立ったか分かりません。隣村
の古い庄屋さんの屏風を修理しましたが、この屏風は普通に
描いたものではなく、胡粉で表面に盛り上がるように描いた
ものでしたので、どうやって修理するのだろうと思ってい
たが、なんとか綺麗に、きちんと出来上がって、大変喜んで
いただきました。十年勉強して、それから殆どすることがな
ったのですが、郷里の家にあるものは屏風から掛け軸までほ
とんどものをきちんと仕直して仕舞いました。松岡先生が
「あなた、体が丈夫になったら、東京へ出ていらっしゃい。
お仕事は沢山あるよ」とおっしゃって下さいました。「どう
するかね」と主人は考えていました。ここにいってもお仕事
に限られていますし、古い立派なものを持っている人はそん
なには多くありませんから、修理の仕事もそんなに沢山あるわ
けではなく、東京に行くようにするかね、と話していまし
た。

【大阪に出る】

そんな話をしているときに、信州でのご聖会へ行く途中でちょっと会いたいからと、西条先生ご夫妻が岐阜の田舎に立ち寄って下さいました。主人が達者になって、働いております様子を見て頂いて、大喜びして神様に大きな感謝を捧げて下さいました。そのころ、二軒を借りていまして、住まいと仕事場とに使っていました。縁側つたいに行き来が出来ました。先生方が今晚泊めて下さいと言われるので、何処に泊まっていたでしょうかと思ひまして、仕事場にある大きな台を片隅に寄せて、もうひと部屋は糊を使うだけであまり汚れていないので、そこに泊まっていたできました。銭湯に行っていましたので、家にはお風呂もありません。どうしましようかと思いましたが、土間に大きなたらいを出して、行水をしていただくことにしました。そんなことで先生方に泊まって頂きました。

先生方は朝はパンを召し上がっておられたので、商店街に行きましたら、食パンが売っていましたので、ジャムなどを揃えてお出ししました。朝のお食事を済ませて頂いてから、大阪に出ないかとのお話がありました。金田さんと言われる韓国から来られた方で、柘植先生の所で信仰に入られて、献身するようにしておられたのでしようが、竿代さん方の勧めでリンレイのワックスを扱う仕事をしておられたのです。金

田さんの所で働いていた人が、仕事に失敗したので、その方の後をやってくれないかと、先生のお話でした。なんとか金田さんを助けてあげたいと思われたのでしょうか。主人はそのお話を聞くと直ぐに従って、大阪に出ることにしました。

大阪に出る前に、主人は一人で半年ほど東京のリンレイに仕事の事などを勉強に出掛けました。それまで主人はずっと和服でしたが、東京から帰って来たときは洋服でした。玄關を入るなり、これは竿代さんのだが、もらってきたよ、と。大笑いしました。

それから、大阪の一番繁華街の北浜に近江兄弟社のウォーリス先生のお店だったところをお借りして店をはじめました。それが昭和十二年でした。岐阜に居ます間に、たえ子と澄子が生まれました。ですから、大阪に出た時は、一家五人でした。それから大阪で、恵子と信夫が生まれました。大阪での住まいと店は二階建ての四・五軒続いた建物の一軒で、二階が住まい、一階が広い土間になっていました。そこを板の間にして、机を並べて仕事をして、土間の片側は研磨機等の機械を置いていました。店には若い方が寝泊まりをし、食堂もありました。金田さんの弟さん、東京の本社から手島さん、川村さんが京都から、早稲田を出た方、慶応を出た方など、とにかく教会に来ていて仕事のない方はリンレイに行きなさいと、だからこの狭い所に一杯でした。日曜日にはビル

掃除の為に五十人位の人を雇っていました。一人五十銭でした。わたしはよく三和銀行でしたか、日曜のたびにお金を出し入れに行きました。お店の方々にはご飯を炊いてあげました。田舎から働きに来ていた方から大変助けられました。トランクに一杯お米を持って来てくれました。その頃はお米が少ない時代でしたから、私たちはおうどんを食べていました。それはお店の隣が朝日新聞の販売店で、さらにその隣がうどん屋さんでした。そのうどん屋さんが大きなお鍋にうどんを作っているも持って来てくれました。土曜日の午後と日曜日はビル・クリーニングの作業でしたから、大勢の人がやってきました。皆が作業から帰ってくると、私はモップを洗うので大変忙しくしていました。二階の窓の屋根の上に一間四角くらいの物干し台がありました。そこに運んでいって干しました。日曜日はこんな仕事がありましたので、礼拝には出られませんでした。市岡に柘植先生の信仰に導かれた黒石先生の教会があり、そこで子供たちは日曜学校に出ています。私も主人も出られませんから、毎週黒石先生に来ていただいで、家庭集会をしていただきました。その時は金田さんの弟さんや、手島さんでしたか、集会に出었습니다。大阪を離れるまでこの家庭集会は続きました。

岐阜から出て、全く初めての仕事でしたが、本社からの二人の若い人が良く分かっていてくれましたので、助けられま

した。お手伝いの方も本社から、ナツ子さんをおくって下さいました。その頃のワックスは四角い缶で丸い蓋のついた容器に入っていました。蓋を開けると、表面に茶色い油が浮いていました。主人はこれは余所へは売れないといって、それをお鍋にいれて熱を加えて手を入れていた時に失敗して、足に大火傷をしました。しかし、それから段々にワックスも品質が良くなってきました。

このころ、邦次は大阪で茨木中学へ通うようになりました。たえ子が小学校、澄子が幼稚園になっていました。恵子が昭和十四年に生まれ、信夫が昭和十八年に大阪で生まれました。考えてみると、子供も小さくて全く未知の仕事によくも踏み出したものだと思いますが、どんなに考えてもただ神様の導きとしか言えません。神様の恵みと憐れみでした。神様に守られ、導かれていなければ、あの大勢の人を使っている仕事、その方々と一緒に生活していくことは、とても私たちのような世間を知らない者には出来なかったと思います。主人は北浜の町内会の御用もしておりました。

子供たちも神様のお恵みで、愛珠幼稚園や、愛日小学校など、北浜でもいい学校へ導かれました。また、良い先生に指導を受けました。父兄会の時に先生から、あなたは子供をどんなふう育てているのか、と尋ねられました。教会学校へいっていますと答えました。みんな素直で、いい子だな、と

冗談のように話していました。邦次は体が弱くて、肋膜炎患ったりしました。中学は大阪でしたから、小学校の何年の時でしたか、一年か二年足らずでしたが、母がまだ健在でしたから、郷里へ預けました。健康になって帰って来まして、中学に入りました。昭和十九年に戦争も激しくなり、老人・子供をもって家庭は疎開するようになると言われていました。妹から家が空いているから来るようにと勧められて、大阪を引き上げて、私の郷里の安心院に参りました。

大阪にいます時から、戦争のために空襲が激しくなり、床下に防空壕を作りました。空襲の度に其処へ入りました。近くの銀行だったでしょうか、大きな地下室があって、ご近所の人達が、さあ、空襲だ、というのと、子供を背負ったり、両手に荷物をさげて、防空壕へ避難していました。主人は町内の防空のお役をしていましたので、いつもゲートルを巻いたままでした。そんな状態で仕事も出来にくくなり、妹からは郷里に家が空いているからと誘ってくれますので、昭和十九年の終わりごろでしたか、大阪を離れました。

とにかく、みんなを引き連れて、お父さんが恵子をおぶって、私は信夫をおんぶして、沢山の人でごった返している列車に乗って、なんとか大分の郷里に来ました。日豊線の立石駅で列車を降りて、草履を買って履き替えて、三里の田舎道を歩いて行きました。大阪を引き上げる時は、町の人々が駅

まで送ってくれました。リンレイの仕事は一緒に働いていて、信頼できる方に全てをお任せしました。



【疎開生活へ】

「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。：わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう。」 列王紀上 一七章一、四節

郷里の安心院の佐田へ帰りましたら、郵便局をしている叔父と叔母とが食事の用意やらして、待っていてくれました。大阪ではお米のご飯は十分に頂けませんでした。郷里へ来ましたら、村の人達がいろいろと差し入れをしてくれました。ある夜、どしんと音がしたね、と話していると、誰が置いていてくれたのか分かりませんが、玄関のところにかマスに一杯のお米がありました。お野菜なども、畑から取ってきたばかりですよ、と根っこも付いたままに持ってきて下さいました。

郷里に疎開して、私の実家に住まっておりました時は、末の弟、忠法が出征してしまいましたので、主人がその代わりに責任を果していました。終戦になりましたが、弟は激戦地にいましたので、とても生きて帰ることが出来ないのではと思っていました。ところが、ひょっこり一人で帰ってきました。誰も迎えにも出ませんでした。主人は忠法が帰ってくれば、ここは忠法が始末してくればいいから、と直ぐに開拓地へ移りました。親戚の者が開拓地の管理をしていましたから、お願いして土地を割当てもらいました。起伏の少ない、高台の土地を世話してくれました。

私の実家には二年位いましたか、昭和二十一年に開拓地に移りました。空気も良くて、見晴らしもよく、由布岳も目の前です。安心院の町の見晴らせるところで、雨模様になると霧が立ち込め、朝霧が日に輝いてとても綺麗でした。周囲には広い原っぱもあり、麦の畑もあり、桑畑もある時代でした。安心院の町に広がる朝霧、目を挙げると由布岳をながめ、いつも天を仰いで神様に感謝していました。

そのころ、日出の教会の吉良先生が月に一度来てくださって、あばら家でしたが集会をしてくださいました。村の子供や青年が集まりお話を伺い、讚美歌を歌いました。クリスマスノときは大変楽しい時でした。山に入って木を切ってきて、クリスマスの飾りをしました。食料難でごちそうは出来

ませんでした。お羊を蒸して、潰してお砂糖と塩を加えて、四角に形を作り、小麦粉をまぶして、それを揚げるのが御馳走でした。

風が吹くと、高台ですから、藁葺きの屋根が飛んでしまいそうな家に、吉良先生は必ず一晩泊まって下さいました。翌日は、安心院の町から四日市に近い円座というところにいました妹（仏木七日代）のところまで歩いて来てくださって、子供の集会をしてくださいました。二十人位、沢山のお子さんが集まりました。そうして、日出にお帰りになりました。

私の村の方で、衆院議員に成られた方の家とその兄弟で台湾総督府の長官だった人の家が道をはさんでならんでいました。その長官の息子さんが私のすぐの弟（忠記）と同学年で、弟が熱心に聖書の話をしていたそうです。そこへも吉良先生が来てくださっていたそうです。一度だけですが、衆院議員になられた方の家で、吉良先生の集会がありまして、村の若い方が沢山集まられたようです。これが続いたらいいのだが、と思いましたが、先生も体を弱くされて、私どもも福岡へでましたので、出来ませんでした。今も、安心院に福音が伝えられるようにと祈っています。

【福岡リンレイへ導かれて】

大阪から郷里に帰りましてからしばらく、松の根から油を

取る仕事を叔父がやっていましたので、それを手伝っていました。それを止めてから、郵便局に勤めていました。

九州で全く初めてリンレイの仕事をするように導かれましてのは、まだ安心院の開拓地にいるときに、戦前からリンレイの本社の社長をしていた鈴木さんの娘さんが、福岡女学院の皆川先生と結婚することになり、結婚式に出てきなさいと鈴木さんから電話がありまして、それこそ郵便局に出勤するままの服装で下駄やら足袋をはいて出掛けました。結婚式が済んでから、福岡でリンレイをやりたいから、福岡へ出てこないかと誘われました。それがきっかけで、引き受けることになりました。

それが昭和の二十六年でした。主人と邦次が十一月に薬院にいた叔父を頼んで、出掛けました。叔父に話したら、いいことじゃなと賛同してくれました。叔父も叔母も高校の教師でした。そして、ワックスの缶は石油缶ですし、何十缶と沢山ありますから、叔父の家の塀の内側に並べて積み上げていましたが、地行西町に家を借りて、地下室にワックス等を入れて、二階には主人と邦次が住むことにしました。それが二十六年の暮れでしたか。私はまだ子供たちの学校のために、翌年の三月の終わるかか四月の始め頃に、子供を連れて後から参りました。その時、叔父は家族も一緒だから、離れを使いなさいと言って、空けてくれました。八畳二間ありま

した。そこにトイレや台所も付いていました。そこを貸してもらって、四月から暮れの十二月まで置いてもらいました。

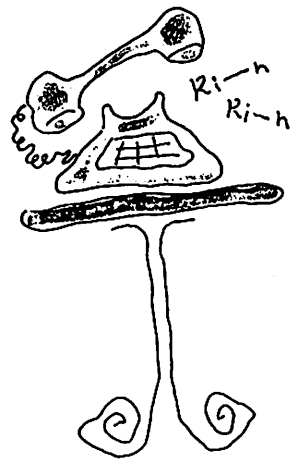
家賃も取ってくださいと言いましたら、千円でも二千円でも置きなさいといってくれたので、毎月二千円あげて借りていました。それで大変助けられました。その間に、大濠の近くの鳥飼に以前のリンレイの家を建てました。その時の大工さんはクリスチャンだったと思いますが、五・六十万円かで二階建ての家を造ってくれました。丁度クリスマススの時に、まだ完成していませんでしたが、物を置いてみると盗まれるので、もう住んでも大丈夫だから移ってきなさい、と大工さんが言ってくれました。その時、主人は宮崎かに出掛けて留守でしたから、邦次が荷物を引く車で荷物を運んでくれました。主人が出張から帰ってみると、叔父の離れは空になっていて、そこから大濠まで歩いてきました。クリスマススの夜から、大濠での生活が初めて始まりました。

本当に神様はいろんな所で助けを与えてくださいました。高い家賃を取られるようでしたら、福岡には居れなかったでしょう。最初に入植したときに馬で広い原っぱを開墾してくれた若い青年二人が、開拓地を出るときに、後を私たちにやらせてくださいと言って、三万円を持ってこられましたので、主人は何も言わずにそのままお受けして、福岡へ出てきてまして、生活から何から全てをそれでまかしました。それ

まで、電車にも乗れずに、薬院から護国神社を通過して、歩いて大濠まで通って教会へ来ていました。たえ子と澄子連れ、日曜学校へ出ようと教会まで来ましたが、まだ門が開いてなかったのか、中に入れないくて、大濠公園でお祈りしていたら、お巡りさんが来て、あなたたちは家出したのではないかと尋ねられたことがあったそうです。

主人は厳しい人でしたから、邦次がよく叱られました。岐阜にいたるときに、お産に手伝いに来てくれていた母に何か口答えすると、ひどく叩いて叱りました。すると、邦次は私の膝に来て涙を擦りつけて泣いていました。逆に信夫は叱られたことはありません。歳をとって生まれたからでしょうか。女の子は叱られたことがありませんが、澄子は大阪にいる時に、駆虫剤かなにかをいただいてきたのに、いやだといって飲まなかった時、叩いて叩いて叱りました。その時、台所で叱っていると、店の人が止めに来ました。そんなことが一度ありました。私は叩かれたことはありませんが、しょっちゅう大きな声で怒鳴られました。福岡に来てから、宮崎、鹿児島、長崎と忙しく飛び回っていました。蜜柑のワックスや選別機を扱うようになりました。選別機の製作は名古屋でしていました。出張先で自分が電話すると迷惑を掛けるから、留守番役の私から電話するよとの事でした。取引先からの電話を出張先へちゃんと取り次ぐようにとよく大

きな声で叱られていました。電話の横に黒板があって、言われる事をずっと書いていました。



【子供たちのことなど】

「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。」 使徒 一六章三一節

子供たちも皆苦労しました。たえ子は開拓地におります時、安心院の高校にかよっていましたが、活水女学院を受験して、合格が与えられました。いろいろ準備しますとき、お布団などに困りました。私の長襦袢やらたえ子の小さいときの着物などを使ってお布団を作り、持たせました。休みになって帰ってきて、かあさん、みんなお布団を干すけれど、私は干せないよ、継ぎはぎだらけだもの、などと言って

ましたけれども、お蔭様で活水は専攻科がありまして、三年間でしたか、卒業しました。卒業したらNHKに勤めたいと、言っていました。主人がビル掃除の会社を始めましたから、そちらの方の会計の仕事を手伝うようになり、外には出してもらえませんでした。そのうちに妙子が結婚しました。

澄子は福岡で叔父が世話してくれて、中央高校を終わり、やはり活水女学院の英文科へ進みました。成績がよかったのでしょうか、卒業式の際に卒業生の代表のような事をさせていただきますました。活水の時は寄宿舎ですが、高校のころは学から帰るとよく机について勉強してました。結婚して富山での開拓伝道の頃に、体を壊してしまいましたが、だんだんに元気になってきました。

恵子は福岡女学院に学びました。徳永先生の指導を受け、先生が召されなされた時、写真に写っています。徳永先生や当時東郷教会の吉武先生などに勧められて、東京神学大学へ進んだのだと思います。私も徳永先生から黒いハンドバックを戴いて持っています。

信夫は安心院にいたときに小学校へ入りましたと思いません。雨が降った時に、邦次が高校へ行くときにぬかるんだ坂道を小学校へ信夫を送っていききました。福岡へ出てから、草香江小学校に移り、当仁中学から高校へ進み、法政大学へ進

学しました。自分は姉達に甘やかされたから、鍛える為に法政に行くんだ、と言って、担任の先生が勧める西南大学は止めました。大学を卒業後、リンレイに就職しました。それぞれに子供たちが恵みによって保たれています。

【生涯のメッセージ】

私が洗礼を受けるときに、与えられたみことばはエレミヤ書の三十一章三節「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」、ヨハネによる福音書三章十六節「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」です。主人から戴いた聖書にもこのみことばが書いていました。詩篇四十六篇は丹後へ出掛ける時、大西先生から励まして与えられ、悔しい時やら腹が立つとき、まだ潔められていませんから、いろんなときにどんなに助けられ、励まされたことか分かりません。

郷里の開拓地に居りますころ、稗が田んぼにいっぱい生えましたが、それを抜いて田んぼの畦に積んでいました。主人は農業のことは全く知らない素人でしたから、気がつきませんでした。雨が降って、稗が他人の田に流されてしまいました。同じ村のお年寄りのかたが大変怒って、家へ来て主

人や私が大層叱られました。その時、私は農家に育っていな
がら、何の役にも立たないで、主人に悪いことをしたと、涙
を流して悔やんだことがありました。

また教えられることもありました。開墾した土地から、草
や木の根がいくらやっても取れません。何度も何度も篩でふ
るって、集めた根を大きな穴を掘って、その中で焼いて、そ
の灰を肥料にしていました。近くに住むお茶を作っている方
が、根を取り除かなくても、繰り返し耕していれば、それら
が腐って、作物の栄養になるのだと、教えてくれました。

何も分からないのに、牛を飼ったり、ヤギを育てたりしま
した。その頃は邦次が大きくなっていましたから、よく世話
をしてくれました。ヤギの乳は体の弱い方に差し上げたりも
しました。郷里の開拓地にはいろんな方がいましたし、生活
が困難でしたら、お産の手伝いもさせて戴きました。

追記

この藤掛姉の「あかし」は一九九五年六月に、お聞きした
お話をテープから纏めたものです。その後、一九九七年二月
に次女の澄子さんは主の御許に召され、続いて、同年八月三
十一日にご主人、邦夫兄を九三歳七ヵ月で主は天国にお召し
になられました。

姉も昨年夏、心臓の疾患のため長く入院されましたが、主
の恵みとみ力によって、癒され、お元気で各集會に励んでお
られます。





さんび

廣田 壽

(前田)

時がくれば

土の中から芽を出して

すばらしい花を開く

ジューツ！と 見つめていると

心洗われる思いに させられる

『我は植え

アポロは水灌げり

されど育てたるは神なり』

(エコリント三・六)

大いなる

くすしき 御手のわざを覚え

ただ 感謝 讚美 あるのみ

「黙想」 朝三題

「時」

上野 米子

(大濠)

「主のみ声」

今朝も亦吾れに生きよと主のみ声

「つくり主」

高く澄んだ青き大空、どこまでつづくのでしょうか。
そして大気の流れ、どこまで流れるのでしょうか。
そして朝の光に輝く山野の彩り、森羅万象
すべて創造者の、御手のうち、何を以て
主のみ旨、御業を計り知ることが出来ましょうか。
只、生かしめ給う主を覚えて、感謝あるのみ。

主につける者には今と云う以外に時はない。

過ぎ去った時は主にお返しし、来たらんとする

未来は主の御計画の御手のうちにあります。

小さき者の今は、日々の生活、歩みを通して、

証を以て主を賛美し生きることが、今の時です。

「人は神のなされるわざを、初めから終りまで、

見きわめることは出来ない。」

伝道の書三十一

「私は恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、

救の日にあなたを助けた。」

コリント第二 六一二

御旨を以て時を備え給う主を崇めます。

晩秋の或る朝に

詩集「別れの日々」

(脆くはあるが暗くない)より

伊規須 太郎

(戸畑)

パワー

(一九九八年三月二四日)

別れの日々は

脆苦はあるが 暗くない

暗くはないが 痛みは走る

すると コトバが溢れてくる

痛みは人の心を純粹にする

痛みは人をたくましくする

痛みは人を優しくする

痛みは人を詩人にする

痛みは人を神に近付ける

痛みは人に多くの事を学ばせる

古今の名曲と言われるものは

どういう状況で書かれたものだろうか?

障害を持ったら

障害を持ったら……

「障害」という字が 私のがわに立つようになった

障害を持ったら……

創造のすばらしさを知った

障害を持ったら……

工夫することを覚えた

障害を持ったら……

人間のすごさを知った

障害を持ったら……

「これも悪くないな」と思った

(注) 一九九四年、左腕橈骨神経麻痺のため「垂れ手」

となった。

コトバ

(一九九八年五月五日)

耳を失った人は 見る(目で読む)事ができる

目を失った人は 聞くことができる

目も耳も失った人は 触れる事ができる

まばたきでワープロを打つ人もある

しかし脳を失った人はコトバを失う

視覚・聴覚・触覚が完全でも

体はピンピンしていても

発声器官には 何の欠陥が無くても

コミュニケーションは失われる

コトバを造ることができない

コトバを理解することができない

文盲とは違う

かつては立派な言語生活を送った人だ

コトバを失った人間とは何だろうか?

(注) 失語症には二種類あると言われます

磁器共鳴

(一九九八年五月二三日)

米国のベストセラー

『Love and Survival』

磁器共鳴で大脳皮質の大きさを調べるといふ話

愛情接触の少ない人は一五%も萎縮していた

動物実験ではストレス・ホルモンが脳細胞を障害した

愛情は脳の成長・健康に不可欠という

老人は偽りの愛情を鋭く見抜く……そして

人は孤独の自覚より苦痛を感じない状態を選ぶ という

これが痴呆の誘因だとしたら

恐るべき警告だ!

泰子に対して申し訳が立たない

しかし もう取り返しはつかない

みなさん 一日でも早く気付いて 理解して

いたわってあげてください

雀

(一九九八年五月四日)

東京に住んでいた時も

お濼ばたなんか 歩いたことはなかったと思う

そうそう坂下門から天皇に面会に入った事はあった

あれは死に別れの挨拶だった

小雨がバラついて来たが

傘をさすほどでもない

ポプラ？並木の下に寄り添うように歩いていると

チュンと咎めるような鳥の声 スズメだ！

えらく無遠慮に……

人のスペースに踏み込むね……

でも敵意を持っている人じゃなさそうだ……

オットットット 近付き過ぎる……

チュンチュン ピョンピョン (上目づかい)

(私 ツカツカツカ……)

チュンチュン ピョンピョン (上目づかい)

むこうの東商ビルに行くんだ アバヨ……チュン

このあたりの子供は小鳥をこわがらせていないらしい

曲芸

(一九九八年四月二日)

ヒナを養う水鳥が ダイビングして

懸命に漁獲に励んでいる

アッ 彼の嘴に 四匹の魚が同じ方向を向いて

キレイに並んでいるではないか！

口にはすでにくわえている……

魚は必死で逃げまどっている……

犬はワンと鳴けば肉を落としてしまうのにすごい！

もし逆向きに捕えたら

どうやって一匹だけ 向きを変えるのだろう

三匹目 四匹目はもっと難しいだろう

こんな知恵・能力を誰が与えたのだろう

ある人は「必死で学習したのさ」と言う

しかし ベースが無ければ

学習も獲得もできない

夜の訪問者

石井 勝三郎

(前田)

夜のしじまを破って、夜鳥の類か、鋭い鳴き声、「ギャー。……」

激しい羽博が杜の方角からおこり、「ヒュー ヒュー ヒュー」と、風を切り私を襲う如く頭上をかすめる。そして沈黙の闇が戻る。

見上る空の星のまたたきに、「あのあたりか」……と独言。ふっと、熱いものが溢れて星がにじむ。

そーうとあたりを窺うが幸い人影もない。「オーイ、降りて来い」

あのときから六周年祭を迎えた。あわただしく過ぎ去ったこの歳月の節目を、仏教では七回忌と云ふ。

そうあのときから、私達夫婦は主と共に歩みはじめた。

私達の固くなに閉じた心に、「天にそなへし住家あり」と、飛込んできた神の御言葉に、どんなにか癒され、励まされたことだろう。

凍てついた心のなかに、主のいたはりの御言葉は、春の陽

差の如く、否應もなく心をうるほす。

死者を偲ぶ心は、今も昔も変わらないが、年と共に息子の霊は、主と共に激しく私に臨む。

「カチャッ」

「カラリ、カラリ、カラリ」と、乾いた戸車の静かに軋む音、誰かがそーと戸を開き玄関に佇む気配に。

「ウンーツ」

今頃誰だろう……「どなたですかぁー」……返事がない、あたりはすでに寝しずまっている。

私と家内は、思はず顔を見合せる。

時計を見ると、すでに十一時を廻っている。訪れる人となし、淋しい山狭の詫住居に、今頃……と、訝りながら玄関に出てみるが、誰れもない。

「ハテ、今のは空耳か……」念のため外に出てみるが、誰ひとりとして闇夜に映る人影はない。

今の音は確かにーと夫婦は頷き、何となくそはつく。

正にミステリー、この奇怪極まる幻聴、幻覚が度々と我家に現はれる。

こう書き始めると、いかにも小泉八雲の世界めいて来るが、妄想や観念でこの文を書いているのではないことを、まずお断りしておく。

末の息子の死は、否應なくイエス・キリストを正面に置くことになる。

可哀想な位に必死に勉強しても、大学と意見の合はない彼は、同級後輩の後塵を浴びながらも、あきらめずやっと手にした大学四回生、卒業まであと一步のところ、またもや躓ついでしまった。

只ひたすらに勉強、そしてその暁に、輝ける栄光が待っている。――

彼が神から授かった設計図は、その輝ける青写真の筈であつた――ろう。

その父である私にさえ、それを窺い知ることは出来ぬ。余命幾ばくもないと覺つた彼は、「僕は一生懸命命はせようと設計図をたどるんだが、いつの間にかずれてしまふんだ。」と、淋しそうに洩らした、そして死。

その時まで、私はキリストを深く知っている訳ではない、宗教映画を観ることによってキリストが、どの様にして生まれ、神の子として数々の奇跡を現はし、人々の苦しみを救ふ、救世主（メシヤ）としてこの世に現はれた、位の知識である。

十字架の処刑の場面が鮮やかに心に残っている。勿論聖書を読むことなど一行もなかつた時代のことである。

最後の晚餐から逮捕へと場面は移る。

否應なく進められる裁判、衆議会は被告イエスを烈しく追求した。

神殿に対する不遜な冒瀆罪、だがこれ位で死罪のの宣告をする訳にはいかぬ。

カヤパはあせつた、何としてもイエスを告発するだけの罪状を見つけねばならぬ。

第一の告発に失敗した彼は、巧妙な誘導訊問を思いつく。

「あなたはキリストか。」

これにイエスはこう答へられる。

「私があなた方に語ることを、あなた等は認めず。

私が問ふことに、あなた方は答えず。また、

あなた方は、私を無罪放免することあるまじ」と。

群衆はさわぎ、ピラトのところへ連れて行き口々に訴へる。

ピラトは色々調べてみるが、さしたる罪を認めず、祭司長たち、役人たち、民衆とを呼び集め、「この人は、なんら死に当るようなことはしていないから許そう。」

ところが、彼等は叫び、声をあげる。

「その人を殺せ！。バラバを許して呉れ。」

そして処刑の日。

四月の始めの昼頃、十字架の重みによるめき、幾度も倒れ、倒れてはローマ兵の鞭が喰ひ、情け容赦なく背中に喰ひ

む。

「映画だ」と、何度も自分に云い聞かせても、あの坂道を、あえぎあえぎ登って行く光景は、陰惨を極め、たまらなく悲しく、いつの間にか涙と共に手に汗を握っている。

「彼等は、何をしているのか判らないのです。彼等の罪をもお許し下さい。」

三時間に及ぶ処刑。

太陽は光を失い、雲は風を呼び、稲妻が走り雷鳴轟く。

神の子の衣服は四枚に裂かれ、くじによって引き当てた。

処刑の兵士は喜びの雄叫びをあげる。

サドカイ派の祭司達は、冷ややかに目と目を示し合せ、心の内であざ笑い、満足の笑みさえ浮かべている。

きのうまで、イエスの話に耳を傾けた群衆も、嘲笑し、知次々に侮辱的な罵声をあびせかけた。

昨日まで数々の奇跡を行なったイエスが、神を呼び、縄抜けの術でも行なふのでは……と、神の現はれる様を見んものと、今か今かと待ち望む。……が処刑は終わった。――

しかし奇跡はついに起きなかった。

三、三、伍々、ゴルゴタの丘を、黙々とうなだれて諦める群衆のなかに、「彼は本当に神の子であった。」と、ささやきが洩れるのを聞き、なぜかホッとするのをおぼえたのであった。

映画を見る限り、何故十字架上のキリストは助からないのか、神の子であるならば、あの縄目を解いて、あのサドカイ派の祭司達に、あの心ない群衆に罰を与へて当然であろうにと、息子の死までの私のキリスト観であった。

キリストは、神の国に近づいた福音を人々にもたらす栄光を背に背負ったお方であり、決して兵士たちの鞭を群衆の嘲笑や唾を受けながら、何も出来ない無抵抗者ではない。キリスト教の秘儀「復活」の意義が判って来るのに、その時から六年の歳月を経て、おぼろげながらも判りかけてきた今日の頃の私である。

神仏混合での六十数年の生活を、送って来たその様な私
が、実は六十年前に、何も判らぬうちに、キリストの福音を受けようとは、夢想だにしていなかったのである。

日、一日と、死に近づいて行く息子を、何としても救ってやらねばならぬ。

井戸の神、水神の祟りらしい、神主を呼び、お祓いしてもらうが、最早ききめがない。

八百萬神々（やおよぶあまがむ）に陸の産物、海の産物を山盛り
に捧げても、私の祈りの言葉に耳を貸さない。

大日如来十三仏の世界からも、線香ローソクは突き返され
る。

「どうぞ助けて下さい。私は六十年、物心がついた頃から

拜んできたんですよ。」と、口説いても、口説いてもそっぽをむく、遂に奇跡は起きなかった。

苦しむ息子は、それでも私に強い信頼を置いてくれた。

「キツと、助けてやるけん、守ってみせるけん。」

と、私の言葉を、葉をも掴む思いで、期待したのであろう。私の大きな手を握りしめて、眠ったが、再び目を覚ますことはなかった。

そして、主を前に置いての六年が過ぎ、秘かな疑問の十字架の意味が、一枚一枚薄紙をはぐように判って来る。

引きまはしから処刑の間、イエスが人々に見せたものは、無抵抗で何も出来ない無力者の姿である。

聖書を読めば、数々の業を行い、病人たちを癒し、死者をも甦らせ、五千人の大群衆に食事を振る舞れ、頼もしい希望を語りかけられた、その様なお方が、何故受難されるのか。

この隠された、キリストの復活の存在に、大きな意義があることに気付く。

三日の後、復活の日がやって来る。

「ハレルヤ」

見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。

死者の霊は、天上界に引き揚げられ、主の御使徒としてお仕えする様は、想像するだにかたたくない。

主の恵みは、常に地上界に臨み、嘆きの淵に沈むとき、引き揚げたまひ、慰めと労はりの御言葉を、喜びも座に座るとき、あふれる歓喜の御言葉を与え給ふのです。

その福音。その体験を次の様に伝えたい。

前田教会で葬いを出して戴いて、七週目、四十七日目の朝方二時頃のことであった。

深い眠りから、フツと、目覚めた。

誰かに揺り起こされたのである。誰かが耳元で「起きよ」と囁いた。

目をさますと、何となく表の方が騒々しい。

大勢の人々が、群がってくる感じである。

「何事」と、正気づくともまだ外は真暗な筈なのに、何となく明るい。

室内も消灯しているのに、ほのかに明るい。

そしてそこに見たものは、二つの薄ボンヤリとした、にぶく光る球である。

フワーツと、宙に浮いている。

それが何であるのか、私にはすぐ判った。「進(ネー)」である。息子の霊球である、私は瞬間に愈々天に召される日が出て来たのだと、覚った。

「お母さん起きて！進(ネー)が逝くよ！」

私の悲鳴に近い叫び声に、家内は何事が起きたのか、咄嗟

のこととて判らぬらしい。

灯りを付け、室内を明るくする。この事象は、家内に現はれていないようである。

彼女には、誰もいないのに、気でも狂ったかの様に映ったさうである。

私が立ったり座ったりを、只、呆然と眺めていただけだったと、残念しきりである。

一緒に生活し、自分がお腹を痛めて産んだ息子の霊がそばに居るのに、自分に見えないほど残念なことはなからう。

もう一つの霊球は、恐らく御使徒の一人であろうか、私はこのお方に会釋をする余裕はなかった。今にして思ふと残ったことをしたと思う。(或いはキリストであったかも)

私は何のためらいもなく、「スーか」と、愛稱で呼ぶと、

「ウン」と、返事が返ってくる。この世で二十六年の間、慈み愛し育んで来た息子の霊魂が、今天に昇ろうとしているとき、親は只、呆然として見つめていてよいものか。

息子の行先、落ち着き先を聞かぬ親があらうか。

「進(ニ)、どこへ行く」

私は必死に話しかけていました。、息子の声は、この世の声とは思はれぬ、くぐもった、地中から出て来る様な声でした。「アルガル…」とも、「アルゴル…」とも聞こへて来ます。

私は更に、「アルガル」ね…と念を押すと、つらそうな声で、「アルゴル…」と、語尾も薄れて姿も段々と消えかかる。忘れてはならぬ、忘れるものかと急ぎ机に向かい、書き記す。

「どれ位かかる所か」と尋ねると、「二、三日位かかる」と、大変苦しうだが、はっきりと返事をしてくれる。

これが、この世での息子と交した最後の別れの言葉であった。

しかし考えてみると、死後四十七日を経過している。そして話をしている間は進の姿をみているのであるから、不思議としか云いようがない。

姿は急にくずれて、もとの霊球となり、南西の空に消え去った。

この不思議な語らいに、死後の霊は、私達の側に四十七日を共に生活していたことになる。

初めての体験に、身も心も震えていました。

あの会話は時間にして、十五秒位か、いやもう少し長かった様な気もしたが…。

この体験を主の恵みによるものと、素直に感謝するならば、私は何と幸福なことであらう。

聖霊が臨むとは、この様なことであらうか。

この現実の世界で、起り得ない出来事を、この目で、この

耳で見聞きしたことになる。

これは大変なことである。

私の腎の提供で、彼は確実に生き返り、社会復帰を目指し、希望を取り戻していた。

手術は成功し、腎は定着したかにみえた。退院間近の或る日、息子は態度を改めて、「お父さん、僕はイエス・キリストに帰依し、生を求めたい」と、話し出しました。

そして将来を、「福祉の仕事で社会に貢献したい」とも。

私達親子三人その夜遅くまで肩を寄せ合って、歓喜を持って、語り合ったのでした。

「キリストに帰依するときは、三人一緒に教会に臨もうよ、退院の暁には、きっと。」

しかしその一週間後、病魔は急に牙をむく。

「拒絶反応、急性肺炎」

一気に呼吸を奪い、開胸人工呼吸も、確実に死に向かい直進する。

腎機能停止、折角定着した腎は死んだ。

病床から残念そうに、「折角お父さんに貰ったのに……」

「もう一つあるから、頑張れ」と励ますが、「もうよかよ、有り難う。」

あれよ、あれよの内に、親子は遂に教会の扉を叩くことが出来なかったのである。

この儘では佛教の葬でしかない、私達親子の心のうちに何が起こったのでしょうか。

あの夜の親子の語らいを、主は見過ごしなされなかった。主は憐み給い、榎本牧師に臨まれ、師は教会の長老達にお図り下さり、神の子として、葬送を得させて下さいました。

この様に主は私達親子に臨まれ、格別な御はからいに只、只感謝いたしております。

「起きよ！」息子との別れを許すと、お示し下さったに違ひありません。

四十七日をこの地に留め、すっかり浄めて、天上界に引き揚げ給う際に、私に立会の栄を給はったものと信じます。

主の御技が働き、死人に口を開かせ給うたのです。

私達の嘆き悲しむ様に、「案ずるな」と、天上界に住まはせ給う様を、語らせ給ふとは。主の御許しなくば、死人が口を開き、語りかけることは適いません。

この様な奇蹟を戴いた私は、主を恐れます。

主の御技に栄光あれ。　　アアメン。

ローマ人への手紙第八章二三節〜二七節

それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでい

る。わたしたちは、この望みによって救われているのである。

しかし、目に見える望みは望みではない。なぜなら、現に見ている事を、どうして、なお望む人があろうか。

もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである。

御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。

なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。

そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。

なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりにしをして下さるからである。 アアメン。

このことがあって、私は秘かに文献を漁り始めました。神の住み給う星を人類は知る由もないのに、文献がある訳も何のに。

私は「アル」と名がつくものに目を通しました。

其の一つに、ギリシャの国に、「アルカディア」と云う地名をみつめました。

案内に、風光絶景の地とあり、古代ギリシャの、ペロポネソスの奥地、牧歌的幸福の理想郷、この世の桃源郷であると。

私は思はず、「ここだあ」と、歓声をあげました。

この六年の間、天国が地球上にあるのならば、この様なと

ころでなければならぬ、この地に行けば、或いは息子にだって会えるかもと、きつとそうだと心の中で騒いでいたのです。

ところが、今年、六周年の祭事をいたしました。このとき書棚を整理中、理科年鑑を何気なく手に致しました。

その中から星座表がバラリと足元に落ち、何だろうとめくったとたん、目が吸い付けられたんです。

何と変光星、「アルゴル星」を見ようと書いてあるではありませんか。三百年程前に発見された星だそうです。

カシオペア座の隣に位置する星で、ペルセウス座の中に食変光星アルゴルがあり、二個の星が互いにかくし合う、食変光星の代表と書いてある。これが六年間探し求めた星であったのか、神の住み給う神秘的な星、どんなにか住みよい星であろう。

主と共に住まいする星、思っただけでも、心がワクワクしてきます。

ようやく心の中で騒いでいたものに、決着がつかしました。

この六年の節目に。

時空を越へ駆け巡る彼等にも、二、三日もかかる遠く離れた星から、目を注いでいて呉れたのか。

何とも云えない嬉しさが、沸き上がる。「オーイ、降りてこい！」

目を瞑れば、目の前に鮮やかに舞い降り、「お父さん」と手を差しのべて来る、あの時の温もりがよみがえる。

静かな、青年の息遣いが傳はって来る。

死者は生きている。

先に逝った人達も幸であってほしい、あの世でも幸せであってほしい。

心の中に生きているは、その心が宇宙と同じ位だと思ったら、死者はそこで生きているのです。

主のお陰で、今日も充実した一日が終わりました。

夜の帳が静かに降りています。やがて彼等の乱舞の刻がやってきます。

待ち遠しい一瞬です。

「カチャッ」

「カラリ、カラリ、カラリ」

今夜も静かに戸が開き、戸が閉まる。



「夜の訪問者」を読んで

金生 一郎

(前田)

今回、石井兄から「夜の訪問者」の原稿をいただき、読ませていただきました。父親の息子に対する愛の大きさがよく表れている文章であると思います。

私が進さんのことを聞いたのは、今年の三月の進さんの記念会の時でした。私とそう変わらない若い進さんが、急に召されていったこと、そして本文中にも記されていますが、その進さんが入院中、「よくなったら、三人で教会へ行こう」と言われていたことから、石井さんのご家族が教会へ来られるようになったことを聞きました。

進さんは闘病という苦しみの中で、主と出会い、この救いの道が開かれていったのだと思います。そして自分が受けた救いの道になんとか両親にも入ってもらいたい、そんな切なる願いをもっていったことと思います。今、このように、石井兄ご夫妻が毎週礼拝を守り、御言葉に耳を傾け、主と共に歩んでいる姿は、天に召されて行った進さんにとって、天で大きな喜びであるだろう、そんなことがこの文章を読んで切々と感じられました。

また石井兄の進さんを思う愛の深さがとてもよく表れています。ご自分の腎臓の一つを与え、そうして進さんが完全に回復されるのを待ち望んでおられたにもかかわらず、急に拒否反応が起こり、召されていった、その時の親としての石井兄の気持ちは私たちがどんなに理解しようと思っても、理解しきることのできないものであるかもしれませぬ。

しかしその石井兄の姿をみていくとき、神様の私たちに對する愛がはっきりとしていきます。父なる神様にとって、わたしたち一人一人を憐れんで、なんとかして「このいのちに生きてほしい」、その一心で、貴い、かけがえのない、ひとり子であるイエス様を十字架につけて下さった。それもイエス様には何の罪もないにもかかわらず、あえて罪の中にいるわたしたちのために。

そのことを思い、また石井兄の進さんに対する思いをあわせてみると、私自身、この神様の愛の深さを思います。そして、これからも主を信じ、主と共に歩んでいきたいと思えます。そしてそれこそ、神様の愛に応えることであり、また神様の願ひであると思えます。

しかしそれと共に、私たちが今ここではっきりとさせておかなければならないのは、召された人々がどうなったのかということですが。

聖書では何と言っているのでしょうか。

まず伝道の書一二章七節では、次のように言っています。『ちりは、もとのように土に帰り、靈はこれを授けた神に帰る。』

また、創世記には人が土のちりから造られ、神の息を吹き入れられ、人は「生きる」ものとなったと記されています。だから私たちは、この地上での神様の与えて下さった使命を果たし終えれば、この体を脱ぎ捨て、そして父なる神の御もとへと帰って行くのです。死んだ後、私たちが行くところはこの地上や星ではありません。なぜなら、それらもすべて神が造られたものでしかないからです。

日本では様々な宗教の影響から、「靈が残る」「靈が私たちも守る」「他の物に生まれ変わる」などと考えている人も多くいます。お盆には先祖の靈を供養する、しかし聖書ではそのようなことは全く記されていません。だから、記念会、墓前礼拝などをする場合でも、その人を拝むわけではありません。ただ先に召された兄弟たちの歩みを振り返り、その信仰にならって歩む、それが記念会、墓前礼拝の意味となります。

また時に教会の納骨堂に来て、拝もうとする方もおられますが、それも同じです。墓地や納骨堂に靈が残っているわけではありません。大切なのは「靈はこれを授けた神に帰る」このことを常に心においておかなければなりません。

イエス様は弟子たちに最後の別れを告げるとき、『あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。』とおっしゃられました。この御言葉の通りに、私たち、信じる者には、既に天に場所がよいされています。家族、親族、友人など愛する人々と共に、この天に名前を記していただいて、そこに住まわせていただく、それが私たちにとって最も大きな喜びであり、望みます。

地上のことには限りがあります。限られたこの地上だけでなく、永遠に続く生涯において、神の御もとですばらしい日々を過ごすように、たえず主を前において、主の声に聞き従う毎日、主を信じる毎日を送っていききたいと思えます。



プラス思考でその日まで

貞 サユリ

(前田)

人はこの世に生まれ出て、かの日には必ず死ぬ。虚弱体質で幾度か死のふちに立たされたが、門前払いを食わされ、今の年まで生き延びてきた。

学生時代や青年時代は死ぬことなど考えたこともなかった。若さが武器だった。ひたすらに働き、遊び、楽しみ、そして結婚、子育てに追われ、人生の半ばを過ぎたとき、ふと死について考えるようになった。

日々の生活において、不意に病が訪れてくるかもしれない。あるいは事故が襲ってくるかもしれない。拒んでも、必ず迎えなければならぬ死。

その準備として、毎日の生活態度を整え、置かれている状況に素直に順応していくことが大切。つまり物事をすべてプラス思考で処理すれば、どんな悩みもストレスも消えてしまはずだ。

葬儀の形式、葬送曲……すべて家族や親類に託している。借金住まいで財産はなし。あと何年生きられるか知る由もなし。日々老いを重ねているが、感謝の気持ちを忘れず、健康

管理を怠らず、残された時間をゆっくりと刻んでいきたいと願う。

オルガン秘話

貞 サユリ

(前田)

私は、四・五才の頃から母に手を引かれ、ナザレン教会に行っていました。広い畳の部屋に、真白のカバーをかけた座ぶとんが沢山並べられ、母といつも一緒に座っていました。誰もいない隣りの席の座ぶとんを、ソツと母の傍に引き寄せ、母に寄り添う様に座っていました。オルガンからメロディーが流れ、みんな讚美していました。その日に歌った歌は殆ど覚え、家に帰って木琴で弾きながら歌っていました。小学生の頃、母にオルガンを習わせて……と幾度となくせがんだのですが、無理な事でした。当時戦争の最中(昭和十七・八年頃)、余程裕福な子供でないと習えない時代だったので。でも学校で希望者のみ、歌の授業があり、今で言うクラブ活動でしょうか?、放課後学校に残り、歌と舞踊を教えて貰いました。月謝五圓だったと思います。中学に入り、物心がつく様になり、義父に育てられたので、色々つらい思いをしま

した。教会には時々行っていましたが、いつも父の顔色を氣遣い、心はいつも沈みがちで悲しくなり、涙が出る事はしばしばでした。その時讚美歌が何より慰めとなりました。幸い教会が近くだったし、教会は私の駆け込み寺の様なものでした。その頃弾く事に興味をもち、教会に行っては、先生、奥様と話し、その後必ずオルガンを弾かせて貰い、オタマジャクシを見ながら、単音でさんびかを弾いていました。

まあ、私が保母の仕事を選んだのも、弾く事が好きだったからです。能力、資格、体力、ないないづくしにもかかわらず、幼稚園教諭助手として、働かせて戴いたのも、主の導きであったと思います。何のとりえもない私。『お祈りが出来る人』。ただそれだけで採用して戴いたのです。最初の頃は、無資格無経験。若手のベテラン教諭に囲まれ、心身共に疲れはて、辞めよう、と何度思ったか分かりません。でも資格を取る迄は、唯忍耐のみ、と頑張りました。

神の御旨を行って、約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは忍耐である。

(へブル人への手紙十章三十六節)

そして何としてでもピアノの弾き方を覚えようと一生懸命でした。子供達の前に立ち、司会をしながら、主任が弾くピアノの手を、横目で見ながら、その指を見て、黒鍵の使い方

や、まず歌を覚え、テンポ、リズム、弾き方、とに角自分が一曲弾く為に、苦心惨たんしたものです。何故：それは『基礎』がないからです。階段は一段目から順々に登らなければなりません。(基礎のレッスン。)そして一段、一段、一歩ずつ登り、徐々に上達していくのです。そして百段まで到達して一人前になれるのです。(ベテラン。)これは私が勝手に階段を例にとり、一から百迄の数字を頭の中で作りあげている訳ですが、私の場合、一気に二十段位かけ上がり(基礎が抜けている)、人の半分以下のペースで、一段、一段、上っていく様なものです。今から、努力し、勉強しても、五・六十段以上は絶対に登れないのです。(何でも自由に弾く事ができない。)でも私の様なとるに足らない者が、皆さんが讚美するお手伝いをさせて戴ける、これ程嬉しい事はありません。主が力を下さり、支えて下さるからです。

オルガン(ピアノ)にまつわる不思議なエピソードを紹介させて戴きます。昭和四二年、保母試験の時の事です。家にはピアノもオルガンもありませんし、先生にレッスンを受ける余裕もありません。それで夏休みを利用し、誰もいない幼稚園に、毎日せっせと通い、唯一人で楽譜とにらめっこしながら弾き続けたものです。(指使いは全くでたらめ。)バイエル六十番から百番迄がテスト範囲だったので。六十番から百番迄順追って、練習を重ね、どうした訳か、八二番だけ

飛ばしていたのです。(#記号四つ、全く弾けない。)主任の先生が、「難しいのは試験に出ないよ。マーチが弾ける程度だったら大丈夫。」と云い、練習しなかったのです。でも試験間際になって、何故か胸騒ぎがするのです。幸い、知人の紹介で別府音大在学中の方に、二日間八二番だけ特訓して貰いました。びっくり驚いた事には試験当日、八〇番と八二番の二曲がテストだったのです。三人の審査員が目を光らして、見ていました。緊張しましたが、何とか弾けました。審査員の一人曰く、「良く弾けましたが、指が間違っていますね。」私はドキッとしました。何故か不思議と云うのか、主

が「この曲を練習しなさい。」と聞こえない声が聞こえ、主が示して下さったのです。ピアノ以外に七科目のテストがありました。児童心理学や精神衛生、ややこしい問題が山積みでした。頭は悪いし、その時の年齢三十三才、一行の文章を暗記するのも手間がかかりました。でも主の助けに依り、力を下さった事、昔も今も変わらず主が生きて働いて下さり、不思議な出来事に遭遇する度に、神様の愛の業を体験しました。合格の通知を受けた時、うれし涙で顔がくしゃくしゃになった思い出が、今もなお心に残っています。遠い昔の事ですが…。

『私は基礎のない家』の様であるかも知れません。風が吹

くとグラツと揺れるか、壁板がはがされるかも知れません。でもいつも主が共にいて助けて下さり、主の大きな、大きな愛の手の中に支えられていると思うと、大安心で、倒れる事はないと信じています。だんだん年を取るにつれ、指の動作が鈍ってきます。目がしょぼしょぼして譜面が見えなくなったりします。ふいに病気が訪れたり、もしくはボケ老人になったら、オルガンも弾けません。生かされているかぎり、私に与えられたタラントを、喜んで主に献げ、わきめを振らず前進して行きたい、と願ってやみません。

『主はその羽をもってあなたをおおわれる。』

あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。

そのまことは大盾、また小盾である。』

(詩篇 九一―四)

『人にはできないが、神にはできる。』

神はなんでもできるからである。』

(マルコ福音書十一―二七)

『それで、イエスは神の右に上げられ、』

父から約束の聖霊を受けて、

それをわたしたちに注がれたのである。』

(使徒行伝 二―三三)

我が思い出（八） 旧満州（現中国）編

鈴木 一幹

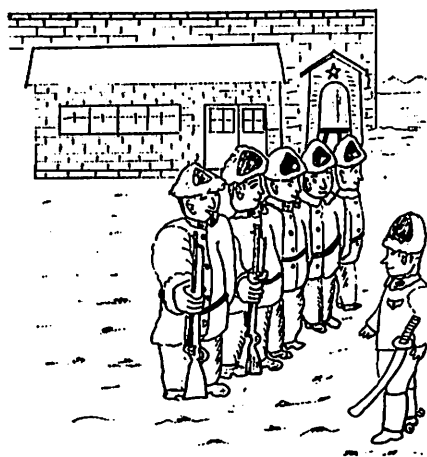
一、極光（オーロラ）の祈り

各衛門の衛兵勤務は、各中隊の一週間交代で行われていました。今日から当中隊に衛兵勤務が回ってきて、今朝からの勤務を命ぜられました。

衛兵司令には中隊付の通信担当下士官高良伍長殿が任命され、その指揮下に、他班から上等兵一名、一等兵二名、当班から私と野中二等兵がそれぞれ命ぜられました。

佐藤班長殿より、

我々二名に対して諸注意があり、「特に夜間の立哨中に不審な、怪しい人影を発見した場合、三度誰何（シカ）するまでは絶対に銃を撃ってはならない等」の詳細



な説明を受けました。野中君と二人は防寒服に身をかため、帯剣を着用し、班内に備え付けてある九九式小銃（小型で眼鏡が付いた、当時では最新式銃）を持ち、中隊玄関前に整列しました。週番士官の石井見習士官殿より諸注意を受けた後、全員に小銃用実弾一人五発ずつが渡され、一行六名は高良伍長殿の引率で出発しました。実弾を持ち、いよいよ任務の重さを感じながら二列縦隊で進みました。

北門衛兵所に到着、前任の衛兵司令から新任の高良伍長殿に引継ぎが行われ、いよいよ衛兵勤務が始まりました。

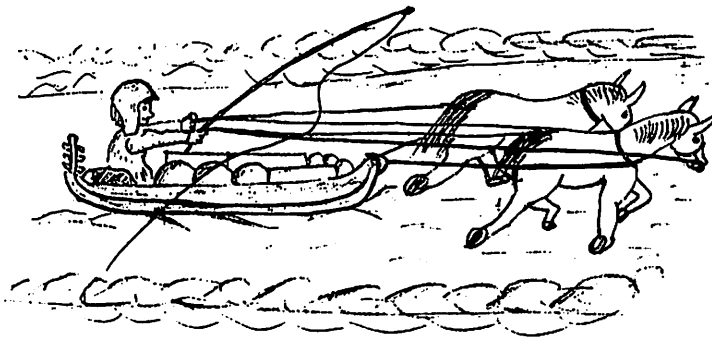
日中は一人二時間の立哨でしたが、夕方六時頃の日暮れから翌朝七時頃までは、気温が下がるので、一人一時間毎の交代勤務で、夜間の気温がマイナス十度から二十度位まで下り、風がある時は、風速一メートルにつきマイナス一度が加算されることになり、従って、マイナス二十度以下になると、三十分での交代となっていました。

北門は通称馬糞街道の出入口に当たる門で、北風が真面に当たり、寒さが厳しい上に、馬糞の匂いで、身体全体が馬糞臭くなるようでした。降雪時は雪に覆われるので臭いは減少するが、今日は珍しく昨夜から晴天だったため、早朝から川土手に新しい馬糞が捨てられたため、かなり臭っていました。私の勤務は午前十時から二時間で、弾の入った小銃を持って立哨しました。日中とはいいながら、外気は零下十度と冷

え込み、防寒頭巾を被り、その上に防寒帽を被り、防寒手袋の上から更に防寒大手袋をはめていました。しかし防寒靴の下から寒さが足に伝わり、冷たさを通り越して少々痛さを感じていました。

門の外の川土手上的の道路は

満州人（現中国人）の荷纜（リリ）が時々「ジャン、ジャン」と鈴を鳴らしながら通り過ぎて行きます。その荷纜はチャン馬（中国産の少し小さい馬）二頭仕立てで「イヨ、イヨ」との掛け声と共にピシッと鞭の音がしていました。内地では馬や牛を扱う場合の掛け声は「セイ、セイ」又は「ドウ、ドウ」と聞いていたが、ここ満州では「イヨ、イヨ」と聞き、国が違えば掛け声まで違うのかと、不思議に思い、異国に来たな、との実感をしみじみと肌感じました。



右から纜が来たかと思うと、今度は左からもジャンジャン鳴らして眼の前を滑って行きました。その時ふと東海林太郎氏が唄っていた「国境の町」を思い出し、静かに口ずさみました。「纜の鈴さえ寂しく響く、雪の眩野よ町の灯よ、一つ山越しゃ他国の星が、凍りつくよな国境」と。

食事は三度とも中隊の食事当番が飯盒に入れて運んでくれました。夕食を終えた七時頃、突然中隊から、布施伍長殿外約十名の古兵達が慰問に来たと言って、焼き芋の差し入れがあり、衛兵所内は急に賑やかになりました。私は、衛兵の増員でもないのに、それぞれ小銃を持参し、何事かな、と思っていると、今夜九時になったら、ソ連軍陣地近くに偵察に行くとのことでした。丁度私が夜九時から立哨することになっていました。やがて九時となり交代立哨して間もなく、ペチカにあたっていた古兵達十名は、布施伍長殿の引率で手に手に銃を持ち、「行ってくるぞ」と言って北門の外に出て行きました。眼前の大鳥蛇江（黒滝江の支流）は現在凍結しているので徒歩で渡れるとのことでした。川の中央が国境線で、これを越えると越境したことになるわけです。

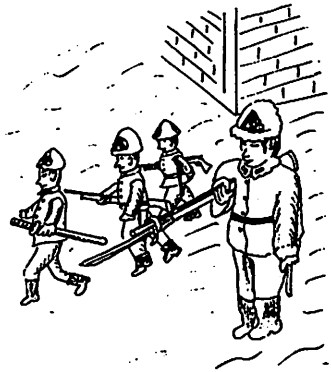
今夜は真っ暗闇で、一行の姿は、すぐに闇の中に見えなくなりました。

昼間と違って前の道路の通行も全く無く、物音一つしない静けさでした。小半時経ったと思った時、ソ連陣地の方から

川面に向かって突然ダダダッ、パンパンと機銃と小銃の発射音がしました。私は驚くと同時に着剣した小銃の安全装置をはずし、小脇にかまえ、下腹にくっと力をいれましたが、恐れに寒さも加わり、体全体に身ぶるいが走りました。

衛兵所内で仮眠している丘も飛び出て集まって来ました。

また発光と同時に「ダダダダッ」と連続的に機銃の音がして、同時に「パンパン、シュルシュル」と異様な音がして、その直後に上空に照明弾が打ち上げられました。と同時に川の中央部が真昼の様に明るく照らし出されました。一時はどうなることかと思ひ、一同銃を構えている内に照明弾の光も消え、前の暗闇にもどりました。すると、その暗闇の中から兵隊の一団が走り出て来ました。皆「ハアハア」と息を切らして帰って来ました。布施伍長殿の話では、一列になって川を渡り終えて、ソ連軍陣地に近づいた時、ソ連軍の動哨に見つかり、あわててもどったのとこのとで、今は川が凍結しているのです、日本軍もソ連軍もおるとのことでした。しばらく衛兵所のペチカにあたった後、布施



伍長殿一行十名は中隊に帰って行きました。

古兵殿と交代し、仮眠しました。夜十二時再び立哨となり、銃に着剣し、門に立ちました。外気温度は零下二十度は越えているようで、足の指、銃を持つ手、耳、鼻等に痛みが走り、瞬きの時には臉が上下くっつく様でした。物音一つなく、また風も無く、真暗闇で、何となく不気味で、三十分交代ですが、その三十分が長すぎる感じでした。そう思っていると、北のソ連領の上空が少し明るくなり、サーチライトの光の様なり、更にその光の北の方から今度はピンク色の光が、これも影絵の様に青色の光と重なって五色の走馬灯の様に輝いていました。立哨の私は、しばらく見とれていましたが、我にかえり、急ぎ衛兵所内に戻り、仮眠中の衛兵司令の高良伍長殿にその旨を告げました。高良伍長も他の兵達も皆起きて来ました。

空を見上げた高良伍長殿は「おい鈴木二等兵、お前は実に幸せなやつやなあ、これはな、極光といって『オーロラ』のことや。今まで話に聞いていたが、おれも入隊五年になるが見るのは初めてや、皆歩哨に立ってもなかなか見れんと言っていた。しかも、この極光を一番先に見た者は必ず運が開けると聞いていた。それで貴様は、ほんとに幸せなやつやなあ」と言われました。居合わせた者も皆初めて見たとのことでした。

た。



私は改めて、天地を創造し支配され、すべてを掌握される神の御業の偉大さを身をもって感じるとともに、私を今日まで守り導いて下さったことを感謝し、今後、私を導きお守り下さるよう何度もお祈りし感謝しました。

二、おれの命を聞け

内務班での中食時、佐藤班長殿より「鈴木二等兵は食事が終り次第、中隊事務室の山崎曹長殿のところに行くように。午後の訓練は、用件が終り次第に参加すればよい」とのこと

でしたので、中食後事務室に山崎曹長殿を尋ねました。

山崎曹長殿は「昨日、連隊本部事務室で村上大隊長殿から、明日来る時に鈴木二等兵を連れて来るようにと依頼された。今から本部事務室に行くので、同行せい、よいな」と言って公用腕章を渡されました。「何事ですか」と尋ねましたが、「おれは判らん、とにかく行こう」と言って出かけました。

連隊本部棟の正面玄関を入ると、右側が事務室と会議室、廊下をはさんで前が連隊指揮班室となっており、また玄関の左側が各大隊長の部屋が四室、応接室があり、その前の廊下を挟んで、連隊長室、会議室、将校室等があり、私の所属する第二大隊長室は玄関から廊下を左折して三番目にありました。

山崎曹長殿はドアをノックして「第四中隊山崎曹長、鈴木二等兵を連れてまいりました」と挨拶しました。すると中から「ああご苦労、中に入りなさい」と大隊長殿の声がありました。私は山崎曹長殿の後に従い中に入り「鈴木二等兵参りました」と挨拶しました。山崎曹長殿は「事務室に用事がありますので行っております。何かご用があればお呼び下さい」と言って退出されました。

大隊長殿は私を机の前の椅子に掛けさせ「楽にしなさい」と言われました。机の上には何冊かの書類が積まれ、一部は

開かれていました。

「君は行橋町出身で、学校は豊津中学だな。おれは隣の抜郷村だ。おれも豊津中学で、君より四年上だ」「はい、そうでありますか」と答えました。そして何事だろうかと今まで心配していた不安が幾分消えて行きました。そして急に懐かしく、また何と言う奇遇なめぐり合わせだろうかと思いましたが。私は中学の頃行橋町行事にある八幡神社の境内でいつも一緒にバレーボールやキャッチボール等して遊んでいた子供達の中から四年上の先輩を思い出し、その名前を言ってみました。先づ行事本町にいた田原医院の息子で田原康志、東町の白川宏、同じ本町の細野修氏の名前をあげました。すると村上大隊長殿は「細野君は一組で彼は明専に行ったな。他の白川と田原とは同じ四組で皆よくできる連中だったな。田原は鹿児島島の七校に行き、白川は熊本の五校やった。お前は皆と友達やったのか」と言われました。私は「はい、三人にはよくかわいがってもらいました」「三人はその後どうしているのか」「はい、細野さんは明専卒業後、現役で兵隊に行かれ、田原さんは阪大医学部に行かれ、白川さんは京都大学に行かれています」と答えました。いろいろ話を交わしていると、当番兵がお茶を持って来られました。「お茶を飲みなさい」と言われ、本論に話を進められました。

大隊長殿は書類を手にし、「これは君の書類だが、君は幹

部候補生の試験を辞退する、となっているが、本当にそれでよいのかね。辞退する理由は何かね、どう言う訳なのか話してみなさい」と言われました。

私は佐藤班長に説明したとおり「中学時代に教練の教官だった権藤少佐に進められ、陸士を受験しましたが、視力不足で不合格となり、それ以来、私は軍人には不適格だと思い今回の受験も辞退しました」と説明しました。大隊長殿は「ああそうか、良く判った。実はおれも権藤少佐の勧めで陸士を受け、卒業後、久留米の野砲隊に配属され、二年前当連隊に転属となった。君は既に現役で入隊し、立派に軍人になっている。それなら幹候の試験を受けて合格することだ。この書類の中に、学校の甲幹適任証も添付されている。今度の試験は学科と面接だけであるから、何も心の心配はいらない。たまたまおれが今回の試験の試験官を命ぜられているので、君はおれにまかせておけ、良いな。中隊長にはおれから受験させることになったと伝えておく、良いな」と受験を説得させられました。私は「しばらく考えさせてください」と答えると「考えること等何も無い。とにかくおれにまかせておけ、良いな」と再三言われ、余りにも積極的な、しかも強引な命令であり、有難いような、迷惑のような複雑な気分でしたが、「良いな」の念押しに、ついに「有難うございました」と答えてしまいました。

帰班後、佐藤班長殿の部屋を尋ね、幹候受験は私の本意では無かったが、受験せよとの命を大隊長殿から言われ説得されたことを報告すると「それは良かったではないか。受験を目指して頑張れよ」「おれはなあ、宇佐の高等小学校を出て直ぐに大工の弟子入りをしたが、全く性に合わず、十八才の年に陸軍に志願し、入隊三年で現在やっと伍長や。貴様は最初から幹部候補生の資格があるやないか。受験に通れば、一年もすれば少尉殿や。とにかく良かったなあ」とのことでした。その後引き続き事務室に山崎曹長殿を尋ね、借用していた公用章を返却し、大隊長殿より幹部候補生の受験を説得されたこと報告しました。山崎曹長殿は「そんなことだろうと想像はついていたが、やっぱりそうだったのか。貴様の中学の先輩か。それはほんとに運が良かったなあ、まあしっかりやれや」と言われました。

その夜就寝しても、なかなか眠れず、毛布にくるまったまま神様に祈りました。「神様今日も一日私をお守り下さり、厚く感謝します。また今日は、はからずも大隊長殿が私の中学の先輩で、私の幹候受験を命ぜられました。私にはどうして良いか判りません。どうか貴方のお旨のままに私をお導き下さい」と。

三、中隊事務室勤務を命ぜらる

日々の訓練は寒さが加わるに従い厳しさを増し、砲の射撃訓練、乗馬訓練、営外雪中行軍等が繰り返され、初年兵は皆、持てる体力を消耗し尽くし、皆へとへとになって帰隊していました。その上休むまもなく馬舎に行き、水飼、飼付を済ませ、やっと夕食となるわけです。これを済ますと、今度は古兵殿からの諸注意に続く制裁で、最近ではこれにも馴れ、早く制裁が終わって眠らせてほしいと思うようになっていました。今日の夕食後は、各班室以外の清掃日で、当班の十二名の初年兵中、六名は下士官室、他の四名は隊長室と士官室、川上君と私の二人は中隊事務室の清掃を命ぜられました。

二人は事務室に入り、「第四班川上二等兵外一名、掃除に参りました」と挨拶しました。山崎曹長殿が机の上に書類を山積みにし、記録されていたが、こちらを見て「ああご苦労、床を掃除する前に、この机の上を先に拭いてくれ」と言われました。川上君は床を掃き、私は雑巾で机を拭こうとバケツの中で雑巾を絞りながら、なんとなく机の上を見ると、山崎曹長殿が記載しているのは、陸軍功績名簿でした。（これは軍人・軍属個人別の名簿で、本人の勤務場所、勤務期間や、その間の勤務の内容を詳細に記録し、勅令により、叙位、叙勲時にその資料となる）これは私が入隊まで勤務していた小

倉陸軍造兵廠で執務していた仕事でもあり、再びここでお目に掛かれたことに非常に懐かしさを感じました。

その時、山崎曹

長殿が頬杖をして

「困ったな、どの

様に書けば良いの

か判らん」と一人

言を言われ、両手

を上大きく上げ、

大あくびと共に背

伸びされました。

その名簿を見てい

た私は、とっさに

「山崎曹長殿、そ

こは、前に勲労が

ありますので、今

回と併せて勲功と書けば良いのですよ」と言いました。する

と山崎曹長殿は「おお貴様は功績名簿の書き方や、処理方法

が分かるのか」と尋ねられました。私は「はい分かります。

入隊前の仕事が陸軍の軍属で、専らこの事務をしていました」

と前の職業の概略を説明しました。

山崎曹長殿は椅子から立ち上がり「よしそれでは、おれの



椅子に掛けて、この一枚を書いてみよ」と言って私を掛けさせました。私は「それでは始める前に机を拭かせて下さい」と言って拭き終り、川上君に「すまんが、君やってくれないか」と言って頼みました。川上君は快く引き受けてくれたので、早速机に向かいました。私は一枚約二十分位かかって書き終え「これで書き終えました。間違いありません」と答えました。

山崎曹長殿は、しばらく横に立って眺めていましたが「よし分かった。貴様は明日から、おれの助手として、事務室勤務にする。明朝早速、中隊長殿に申し上げ許可をもらおう。佐藤班長にはおれから言うので、命令が出たら事務室に来るように、良いな」と言われました。掃除はどうとう川上君一人で行ってくれました。帰班後、川上君に礼を言うと、川上君は「今日は君は良かったなあ、入隊前にはあんな仕事をしとったのか。どこで役に立つか判らんなあ。僕は経理事務だから、中隊事務室では役に立たないからなあ」と言っただけでやんでいました。

消灯時間となり就寝しましたが、山崎曹長殿の言葉が耳に残り、なかなか眠れず、夢ではないかと何度も頬をつねってみました。

翌朝は、通常通り馬舎での作業を終え、朝食後、佐藤班長殿より「鈴木二等兵、今からおれと一緒に来てくれ」と言っ

て、私を中退長室に連れて行きました。中隊長殿の横に山崎曹長殿も居られました。

前田中隊長殿より「鈴木二等兵、貴様は入隊前は小倉陸軍造兵廠の庶務課人事掛で功績班に属し、功績業務を担当していたそうだな」と質問されました。私は「はい、そうであります」と答えました。すると隊長殿は「よく判った。鈴木二等兵、本日から今から当分の間、中隊事務室勤務を命ずる。今日からは山崎曹長の指揮下に入り命に従うように。なお籍は第四班で従来通りとする。従って事務室勤務以外は第四班で起居するように、以上」との命令を受けました。

中隊長殿はさらに「昨日連隊本部で村上大隊長殿より貴様の幹部候補生試験に受験することになったとの話があった。大いに結構だ。頑張るって必ず合格してもらいたい」と付け加えられました。「ありがとうございます」と敬礼して、佐藤班長殿に従って帰班しました。佐藤班長殿は班内全員を集めて「皆よく聞け。ただ今中隊長命により、本日より鈴木二等兵が中隊事務室勤務を命ぜられた。しかし籍は当班にそのままあるので、起居は今ままでおりである。皆承知するように」と発表されました。

班内の初年兵から「良かったなあ、今後もよろしくな」等と言葉を掛けられました。

これからは事務室勤務になるという誇りと、毎日の厳しい

訓練に参加しなくて良いという安堵の気持ちと、初年兵皆と苦勞を共にしなければ申し訳ない、という、何となく気が引ける感じが残っていました。

班内での挨拶を終え、私物や荷物を整理し、事務室に行きました。事務室には山崎曹長殿のほかにも、もう一人の事務の上等兵殿が居られ、山崎曹長殿より紹介されました。従って今日からは三人で事務を担当することになりました。

山崎曹長殿は「当分の間、期限付で仕上げねばならぬ事務があるので、班での点呼が終わったら直ちに事務室に来るよ。従って馬舎にも行く必要はない。食事も三度当番兵に用意させるので、班で食べる必要はない。事務室で三人一緒に食べれば良い。後始末も当番兵にさせる、良いな」と言われ、そして更に話を続け「この中村上等兵はな、広島高師を出て、佐賀の中学で国語をしょったよって、文章にかけては天下一品や。それに引き換え、このおれは、入隊前は下関の車掌区で列車の車掌をしとったが、事務をすることも多く、これが苦手で陸軍を志願し、下士官試験を受けやと下士官にはなって、やれやれと思ったとたんに、隊長殿には言えんが、また嫌な事務室勤務を命ぜられ、そのお陰で連帯事務室で連帯副官殿や、佐藤準尉にしょっちゅう書類のことで叱られよるわ。しかし、これからは二人が揃ったので、鬼に金棒や。これから連隊本部に書類提出のときは、書類の内容によつ

でどちらかが一緒に行ってくれ」「これからは意が強うなつたわい。アッハッハッ」と言つて背伸びされました。

さてここで私の入隊前の職場のことを少しご披露することにしましょう。前にも述べましたように、小倉陸軍造兵廠の庶務課人事掛功績班に中学卒と同時に筆生として勤務しました。当時は行橋駅から小倉駅まで列車で通勤をしていました。

この功績班の主任は門司から来られていた伊沢さんと言う予備役の砲兵中尉で五十才位の歴戦の勇士でした。また班員は約三十名で、内男性は約十人、残り約二十人は女性で、男性は次々と兵隊に招集されていきました。伊沢主任は功績業務の処理には精通し、皆を厳しく指導し、私も在職二年間主任より公私共に御薫陶を受けていました。当時の小倉陸軍造兵廠では、戦況が激烈になるに従い、兵器の増産が急務となり、廠内で働く人員も軍人軍属をあわせて約三万人を越えていました。従つて、これ等の人々の功績名簿や戦時名簿を保管し、召集で出兵する場合や転勤等の移動時には、それ等の名簿を法規に基づいて処理し、それぞれに転送していました。また勅命によつて叙勲がある場合はその内の該当者の名簿を彰勲局に進達して、勲章の交付を受けていました。

また主任は仕事のみでなく、個人の生活面にもよく世話をされ、特に男子については「各れ君達は軍隊に行く身であるから、軍隊内で役に立つことがあるだろうから」と、功績業

務の法令講習は勿論、自分が日本刀の鑑定士でもあつて、造兵廠内の廠長閣下や各将校から保管を依頼され預かっている多数の名刀を、毎日終業後、希望者に約二時間に渡つて鑑定の講義をされていきました。そのお陰で一年も過ぎた頃は十本中、五、六本の刀については、その刀工名や、年代、何物（備前物）等が当たるようになり、二年後の入隊前には十本中八本までは、ほぼ当たるようになりました。

従つて今度、功績業務の知識が、これほど早く中隊内でお役に立つことになったことは、とてもただ偶然にこのようになったとは思えず、これも神様のお導きだったと感謝しました。

山崎曹長殿の話では、中隊全員の功績名簿を十二月上旬迄に作成整備せよ、との連隊本部の命令が出ているとのことを聞きました。私の経験から推測して、この名簿の整理をする場合は、その名簿の兵員は移動や転勤が発生する際に記載整理されていたので、心の中で、中隊全員か、部隊全部が何処かに移動するのではないだろうか、と、不気味な予感がしていました。

（以下次号）

無題

津留崎 浩行

(前田)

『見よ、神の幕屋が人と共にあり』

これは、ヨハネ黙示録、二十一・三の聖言であります。

私も、此の聖言以下四節までの聖言で大変恵まれ、同時に神様がそこに居てくださるのに、その事を忘れてしまっていることを、主に申し訳なく、反省ばかりしております。

又、今年の聖会、其の後の集会に出させて戴きながら、いつも格別の恵みの中に私共が置かれていることを、感謝いたしております。

『見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいます。』

(ヨハネ黙示録 二十一・三)

特に此の聖言に込められた主の愛の深さ、広さは、私の地上の生涯では知り尽くすことはできないものでしょう。

然し現実、毎日の生活の中で、さまざまな出来事を通して、主が私共と共にいて、働いてくださることを知らされます。日常の些細なことは、つい自分の力でできるように思ってしまう。主に問うことをしないでやっ

まうことがとても多いと思います。そこにさまざまなジレンマの元があるように思います。

日常些細な出来事こそ、その処置のあり方を主に問うこと、そして、主に委ねていくこと、その積み重ねがとても大切なことであることを、私は日々の失敗を通して教えられます。

そのように、主に問い、委ねて歩いていくときに、主は、ご自分が生きて、共にいらっしやることを、事実を通して教えてくださいます。

日常の物事の処置を主に委ねることを忘れるばかりでなく最初から諦めてしまっていることもよくあります。

昨年一二月から少しずつまとめ、今年(平成一〇年)一月中に遅ればせながら出させて頂こうと思っていました。ここにきて書けなくなってしまう。私の今迄の信仰は、やはり自分中心を抜け出す事が出来ず、上よりの様々な恵みも、全て自分サイドで見えていた事、本当に主の側に立って主の心と一つになって見てはいなかった事を示されたのです。

今年の聖会で特に強くメッセージを戴くといったことはなかったように思います。然し聖会后、日が経つに従って、主は自分はずでに無くなっている事、有るものは唯主の心だけであることを教えて下さったのです。

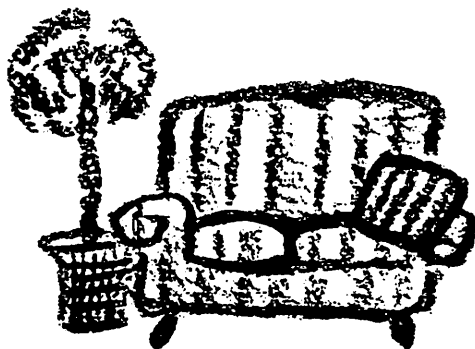
心のどこかに、自分に都合よい事を第一に願ひ、尊い主の

血によって贖い取られて、主の物とされていること、自分は無くなっているはずの事を忘れていたのです。

『我れキリストと共に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我れを愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるによりて生くるなり。』
(ガラテヤ書 三・二〇)

全ての価値は主にあるのです。自分の価値観はもう無くなっているのです。自分の価値観で、自分の意志が少しでも入る生き方を主は求めていらっしゃらないのです。

この御言葉の通りに生きることができるよう、御霊の力を頂く毎日でなければならぬと思っております。



主の賜物

内田 喜代

(大濠)

「主はあしたの光のように必ず現れいで、
冬の雨のように、わたしたちに臨み、
春の雨のように地を潤される」。 (ホセア六の三)

尊い聖名を崇めて感謝申し上げます。

私には四人のいまして、五人目に私が生まれたものですから、両親をはじめまわりのみんなから珍しがられて育ちました。そのせいでしょうか、小さい時からわがままで、成人して教会に行きはじめてからも、この性格はなかなかなおりませんで、多くの方々に迷惑をおかけしたことと思います。

このような、信仰のない欠点だらけの弱い私に対して、神様は忍耐して下さり、限りないご愛と憐れみの中に守り支え導いて下さいました。

私は平成八年二月十日の寒い朝、教会に出かける時に、家の近くの凍った坂道で、二度もころび左肩を骨折しました。病院に二ヶ月間入院しまして、退院後今に至までリハビリに

通っています。始めは痛いばかりでしたが、今になってつくづく考えて見ますと、神様がその時私の上になし給うたみわざは深い大きな大きなご愛と憐れみによるものであった事を思い心から感謝しています。

数々のご愛を覚えますが、先ず第一に夫が召された一年後であった事です。次に右肩ではなくて、左肩だったこと、不思議に頭も足も腰もその他どこにも異常がなかった事です。さらに、骨折入院しまして、今まで知らなかった病院関係の多くの方々にお世話になり、また親しくお交わりをさせていただいて、家に訪ねてくださる方もあり、ほんとうに感謝しています。

今も痛みが少し残り、生活に少々不自由を感じておりますが、この痛みは生まれつきわがままで傲慢な私にたいして、肝に銘じて神様を忘れないようにと、主が残してくださいました大きなご愛の賜物であると感謝しています。痛みは私の身体の一部となって、私の人生が終わりますその時まで、イエス様のご愛の痛みとなって、仲良く付き合っていきたいと思っております。ですから、喜びをもって、日々感謝のうちに過ごしておりますこの頃でございます。

(1996.9.6)

鎮魂歌

正野 眞宏

(前田)

われは わが庭に育ちし トマトを想いて歌わん

われは 土を掘り 肥料をやり 苗を植えたり

日照りの中にも 額に汗して このことをなせり

かの苗は わが思いに勝りて成長し われを喜ばしむ

われは日毎庭に降り これを眺めて楽しめり

もし雑草の生えしを見れば これを取り

日照り続きで乾くを見れば 水を掛けたり

やがて花咲きて 小さき実つけし時の喜びは

わが子の生まれしが如く 歓喜せり

われトマトに近づくに 特有の香り放ちて

わが心にも 生気を与う

その実 数を増し 日々成長するにより

わが夢も膨らみて 色付くを待ち望みたり

しかるに 日経て後 葉の枯れ行くを見付けたり

われ 土の乾きたるを思い 水を豊かに掛けたれど

その葉の枯れゆくを 止むること能わず

ここに至りて ことの尋常ならざるを知る
如何にせば 再びよみがえらするを得るや

われ この道の先輩に聞けり

彼 答えていわく そはトマト特有の病にして

もはや回復すること能わず 抜き捨てるほかなしと

われ いたく失望せり

われは トマトの前に たたずめり

葉 すでに半ばまで枯れ その実も腐れ行くものあり

幹を見るに 自らを支える力なく 支柱にもたれおり

かの芳ばしき香りすでになく 死臭さえ漂う

かかる様にてても 健気にもなお花を咲かせ

如何にもして実を成らせんものと 必死に戦いおるなり

されど すでに死に定められしものなれば

その努力 何の益やあらん

わがトマトの もの言わざるが故に

その苦しみのいかばかりかを思い 涙す

ああ 汝なんぞ豊かなる実結ぶことなくして 死にゆくや

われ 汝を助くこと能わざるを悲しむ

それゆえ、せめて なれが苦しみを和らげんとて

枯れし枝一つ一つを 取り除けり

われ 何をもて 汝を慰めん

ただ いくしきみをもて 哀歌を歌うなり

時に 細き声あり

汝 なんぞトマトの失せゆくを思いて 悲しむや

もしその死を惜しむ心あらば

汝 対するわが思いのいばかりかを知りおらん

病に侵され 死にゆくトマトは汝の姿なり

われは 汝を植え 育て 良き実を待ち望みたれど

結びし実はすべて 腐れ果てし肉の実なりき

これみな罪の仕業にして 汝の努力も修養も益なく

汝は罪の内に 死にゆくものとなりたり

されど 汝を抜き捨てること忍びず

キリストを十字架につけ 汝の代わりに死に渡せり

これ汝を愛するわが印にして 溢るる憐れみにより

このことをなせしを知らざるや

ああ われは悟れり

とうごまの枯れしを通して ヨナに神の愛を教えし如く

神はトマトを通して われに神の憐れみと愛を示せり

われは 神に感謝す

われは トマトを救うこと能わざれども

神は われを死せる者より よみがえらせ給う

さらば この後は 神につながり

命の水を受けつつ 生くるほかなきを知るなり

信仰口上(魂シリーズ)

正野 眞宏

(前田)

これは、家族会の席上で口上したものを、掲載したものであります。

一 草取り物語の巻

東西、東西。さても皆様、ここに取り出したる物は、わが庭に生えし草にして、種も仕掛けもありません。その名は知りませぬが、真正銘の雑草であります。

さて、お立ち合い。何を申そう、実はこの雑草、わが内なる罪の化身であります。

その姿の醜きことと根の深きことを、とくとご覧あれ。

「親の因果が子に報い」とはこのこと。アダムの性質を代々受け継ぎし、罪の姿そのものであります。我らは、神の言

葉を喜ぶ一方で、この罪の勢力が神から離れさせようと働き掛けて参ります。この苦き根のゆえに、わが魂は苦しむのでござりまする。

このたび、この草の二段階、三段階の根を縦横に張り、その勢力を保てる様を見、これぞわが心の庭に深く根を張りおる罪の真相ぞ。これぞ罪の法則、神に言い逆らう元凶なるを発見したのであります。

十字架によって、罪許されしを信じ、かつまた、罪を犯すことなく手を洗い、これにより立派なクリスチャンと思ひし愚かさよ。表面だけ取って、こと濟めりとする浅はかさよ。その勢力は更に深き所にあるを知らざるや。これは神の最も忌み嫌われるものにして、これある限り、汝は神の受けられるものとはならざるを知れ。

「ああ、われ悩める人なるかな。この死の体よりわれを救はん者は誰ぞ」。

如何にせば、この底岩なる罪取り払わるるや。わが努力も、わが決心も無力なり。さればとて、十字架の救いを信ぜしも、かかる罪の根なお厳然と生存せしは、その信仰は無意味なるや……。

決してさにあらず。血は今も働くなり。十字架の福音は、単なる思想にあらず。時が来れば成就する約束にして、信仰によってすでに潔められたと信じるなり。

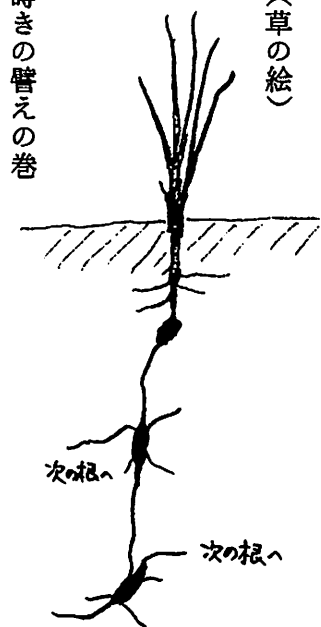
「もし神の光にあるが如く、光の内を歩かば、我ら互いに友となるを得、かつ、その子イエス・キリストの血、全ての罪より我らを潔む」。

根を取り出し、太陽の強い光に曝しし時、その根は死に絶える如く、我らの罪を十字架の光に持ち出さば、その罪は完全に潔めらるるなり。それゆえに、一つひとつ罪を示されし時、己を見るでなく、その都度主を仰ぎ、十字架の光の中に入るべし。イスラエルの民、カナンの地に入りし時、神は七つの敵を徐々に滅ぼすと言ひし意味を悟るべし。汝の救いは、主の十字架と魅りにより、すでに完成せしことを信ぜよ。

さても皆様、私はこの草を通して、このように教えられたのでござりまする。私は腰の痛さも忘れ、ドライバーを持って、一本一本丹念に抜いては土を落とし、その度にわが罪の根深さを思い、主の十字架の有り難さを感じ入ったのであります。このため、一時間かかっても、畳半畳も進ませません。今だに全部終わってはおりませぬが、これからの楽しみとしておりまする。

本日は、これにてお開きと致しまする。今一度、罪の化身なるこの草をとくとご覧になるようされば恵まるること受け合いて御座りますれば、角から角までズ、ズ、ズィーとお願ひ奉るー。

(草の絵)



二 種蒔きの譬えの巻

東西、東西、さても皆様、ここに取っ出し出したるものは、我が魂の診断書で御座りまして月の草取り物語に続く、魂シリーズ第二弾で御座ります。診断基準はどこかと申しますと、マルコ四：一五〜二十、イエス様の種蒔きの譬えで御座ります。

私めは、ここは未信者のためのものと思ひ致しております。たところ、決してきにあらず、これこそイエス様による魂の診断基準であることに気付き、改めてこれにてわが魂を診断いたしましたものが、これで御座ります。これは神様と私のプライベートの話で御座りますゆえ、本来ならば門外不出のもので御座りますが、特別の計らいをもって、公開するもので御座ります。

さてお立ち合い、まず第一の症状は「道端病」で御座ります。診断基準には「サタンが御言葉を奪い取っていく」とあります。私の症状は、実に数多くの御言葉を聞く機会を与

えられておりながら、その多くを聞き流し、粗末にしていることでもあります。この道端病は、別名「その説教は何度も聞いた症候群」とも言いまして、私の場合は、かなりの重症でござります。この病気にかかりますと、「御言偏食症」になりやすく、選り食いするために魂は痩せ細り、末期になると無感覚となり、飢え渴きがなくなりまして、遂には死に至ることも御座りますれば、ゆめゆめ油断なきことが肝要かと存じます。

第二は、「石地病」で御座ります。この病気の症状は「御言葉を聞いても根がないため、日照りが続くと枯れる」とあります。私はもうこれはないものと思っておりましたところ、御言葉のレントゲンに照してみると、まだ部分的に病巣が残っており、困難が続くと「何故、どうして」と神様のお取り扱いに反発している黒い影が、はっきりと写っております。この病気の別名は「自己保命症候群」と申しまして、己れという岩がガンとしてあるため、御言葉の実を結ぶことができませぬ。それで患者は自分で実を結ぼうとしたり、立派なクリスチャンらしい態度を取りますが、その実、貧しい者、裸な者であることに気付かないのが特徴であります。

さて、第三は「いばら病」であります。これは治療困難な難病中の難病でありまして、私めは重症と診断されており

まする。さすがに日頃は症状は出ませぬが、欲の根が残っており、これを塞いでしまします。実にその時の勢いが激しいため、誰もこれを押さえることができませぬ。私もこのことは承知してましたので、なんとか押さえ込もうと努力しましたが、駄目でありました。このいばらが茂りますと、体中を覆い、肉の実を成らせ、悪臭を周囲に撒き散らすのであります。

そもそもこれらの病気は、命の源より離れし「構造的御言失調症」に起因するものにして、いずれも死の病であります。つまり人間的には治療方法がありません。パウロは「この死の体より、我を救はん者は誰ぞ」と叫んでおりますように、我々は死を待つほかないのであります。

しかしながら、我らの主治医なるイエス様は、ご自分の血をもって「死んだ業を取り除き、生ける神に仕える者」、全く新しい者としてくださったのであります。我らはもう一度命の源なる神につながる者となり、多くの実を結ぶべき「良い地」とされているので御座ります。このため、診断書には、但し書きがありまして、「紀元元年、救いは完成し、患者は完治・新生済み」とあるのであります。

さすれば、私どもは再び「構造的御言失調症」にならざるよう、日々、命の主なる方を仰ぎ見つつ、御言葉によって生

きるほかなきものと思ふ次第であります。

さても皆様、これにて目出度く万事解決で御座りますれば、共々に主を賛美くださるよう、角から角までズ、ズイッとお願ひ申し上げ奉る。

靈的診断書

患者氏名 正野眞宏

(新生年月日 S三六・四・三)

病名

- 一 道端病 かなり重症
- 二 石地病 所見あり
- 三 いばら病 重い病巣を認む

上記のとおり診断する。

但し、紀元元年、救いは完成し、患者は完治・

新生済み

平成十年六月二一日

主治医 イエス・キリスト 血判

「弱り目にたたり目」

久保田 宮子

(戸畑)

バランスを崩し、骨折して一カ月以上も入院することになった。先生、看護婦皆々様のおかげで快気祝いをするまでとなる。

ところが、おもいもかけず急性緑内障になり、顔半分が割れるように痛い。すぐ病院に行き、手術してもらった。失明はまぬがれたものの、以前とは違う。弱り目にたたり目。原因ははっきりしないが、どうも神経かららしい。私ほど恵まれた人もいないと自負していただけに、どんなストレスがあるかわからない。

(戸畑区中原西、六九歳)

※毎日新聞(平成十年三月四日)ミニ随筆



骨折と緑内障

久保田 宮子

(戸畑)

寒き朝、下着を一枚着ようと思い、足を上げた時バランスを崩して背中を打つ。

あいにく主人は二階に寝ているので、大きな声も聞こえない。何とか起きて下着をつける。

すぐ近くの病院へ。絶対安静と言われ、一週間寝ましたが、トイレも這ってゆく状態。主人は炊事・洗濯・床漬マゼと本当にした事もないのに良くしてくれる。子供も孫も本当に良くしてくれる、嬉しい。ところがその病院は手術をすすめるので子供たちが騒ぎだし、病院を変える。

今度は手術の必要なし、しかし一カ月の入院と言われ、始めて正月を病院で迎えました。

かずのこ・黒豆・三杯酢・ぞうにあり、驚きました。二日の昼、妹と姪と一緒に正月料理を重箱につめ、一緒にと持ってきました。本当に嬉しかったです。

入院してすぐ心を騒がせないがよい、神を信じ、またわたしを信じなさいと言うみ言葉があたえられました。入院生活も悪い事ばかりなくて、自分の老後について考えさせる事が

たくさんありました。こんどほど信仰を持っていて良かったと思つた事はありません。

神の与えてくれた時と思つてゆっくり休養しました。この場を借りて、先生始め聖徒の皆さん、見舞いがありました。この

退院して一カ月、快気祝をしている時、急性緑内障になり驚く。どうも神経らしいが、手当が良かった為失明はしませんでした。以前とは違う。しかし神様はちゃんとのがれる道を備えて下さったから感謝です。今は月一回中間市の山名眼科に車で通っています。教会には杖を持って一歩一歩大地をふみしめて行き、祈っています。帰りは畠山宏さんの車で帰っております。

下手ですが歌がたくさん出来ましたので読んで下さい。

親子ほど年の差のあるおばあさん

若さの秘訣は朝夕のみじろい

主治医が入院と聞いて驚きぬ

我が治療は如何ばかりかと

教会の友より頂きし賛美歌の

テープと共に我口ずさみ

賛美歌のテープは何よりの見舞なり

入院のあいだ聞き給いし

愛する友を残して退院す

嬉しくもあり悲しくもあり

院の食事以外一切口にせず

守り通しがやせるはむつかし

昼夜なく看護婦の名を呼ぶおじいさん

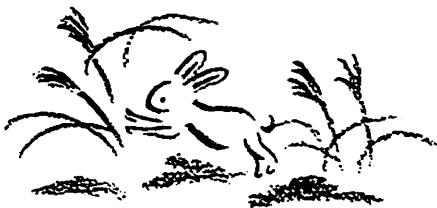
むくろとなりて今は悲しも

一人部屋皆さびしいと言わしも

イエスと一緒にだから嬉しい日々

一日もかかさずの見舞主人には

あらためて感謝するのみ



四回目のOB会

久保田 宮子

(戸畑)

梅雨入りしたとの事で心配しましたが、晴天に恵まれ、無事に終り世話人としてはホットしています。

本音を言いますと私杖の身となり、二年ぶりに友と会うのが「イヤ」でしたが、お世話をさせてもらっているのと、遠く東京方面からも来て下さるし、又お互いに年を重ねますので転ばない様に注意してもらおう為出席しました。

最初に旭硝子の中に入り、以前よりずっと変わった様子を見てもらい、守衛さんに頼んであったので写真を撮り、それからスペースワールドを見る為ロイヤルホテルの十三階に行きました。一望に見えるスペースワールド、皆驚きました。中々近くにいってもこの様に展望する事はないので感激しました。

それから目的の地主人のカラオケの生徒が経営している店中、央町に行きました。

すばらしい料理がしてある上に驚いた事に多数生徒さんが手伝いしてくれて、歌う方が多くて、とても盛り上がりました。

私も楽しい一時があったと思えました。又何時

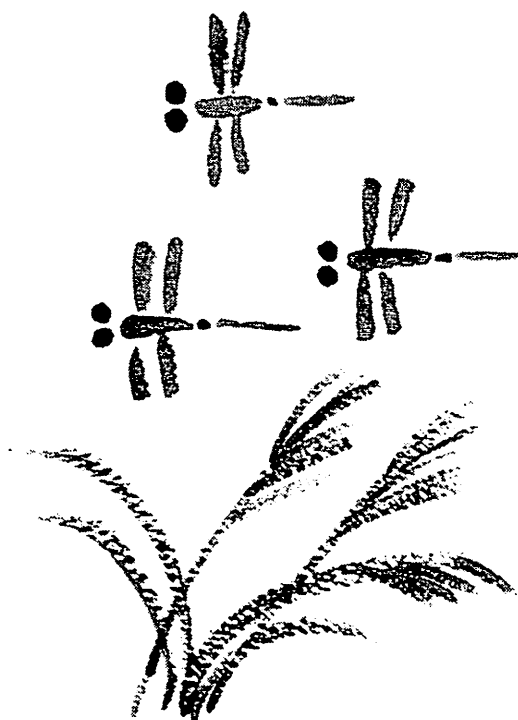
の様に柴田さん(今年九十三才)より百才演を頂き、皆さん喜んで二年後を約束して帰りました。

この生命ばかりは神様だけしかわかりませんが、元気でと別れました。

すこし時間が超過したのが悪いだけで何のトラブルもなくすばらしい会でした。

後日私の体を心配して多くの方よりTELを頂き、本当に嬉しく思いました。特に主人にはお世話になり、改めてこの場をお借りして「ありがとう」と言わせて頂きます。

目が悪くて読みにくいと思いますが許して下さい。



自分の信仰

緒方 昌隆

(戸畑)

*自分は長距離トラックにのっていたが、畳の上で死にたい
と思い、タクシーに変わりました。幼なじみのY氏の大学の
先輩だったM運送の社長を乗せたのが、きっかけとなり、鳥
栖市の運送会社に行くようになり、大変感謝しました。

*仕事の内容は、ユニック車と言う車に乗っています。又、
日清製粉の重たい小麦粉(二五kg)を早朝、大きなパン屋に
運んだり、米や麦を運ぶ仕事も有ります。(米切りといいま
す)肩がビリビリします。

*自分は、仕事にも趣味を越えた犬にも頑張っていたのだ
が、ある夕方、利き腕の親指をワイヤーではさんで切り落と
すと言う事故にあった。自分は、たいしたケガだとは、思わ
なかったのだが、医者が一週間ほど入院するようにとの事。
しかし、大型犬が二匹もいるので心配でたまらなかつた。

*抜糸をする時、さすがに痛かった。以前、何度も腰や痔で

入院経験ある自分だが、半分になった左親指が大きく膨れ上
り、酒を飲まずにはおれなかつた。

*聖マリア病院においては、色々な方々からのお見舞いや励
ましのお便りを、戴きまして大変有り難うございました。
又、遠方から、わざわざお祈りに来て下さった伊規須牧師や
自分の事を祈って下さった戸畑教会の聖徒方には、心より感
謝しています。お陰様で、三カ月後の五月六日から又、仕事
に頑張っています。二匹いた犬は、あきらめて、今は神様の
方に向かって進んで行きたいと、思っています。それに事故
にあった時、聖書をバックに入れてたので、社長始め社員は
「自分がクリスチャンである」と言う事がわかり、これから
は仕事がしにくいのではないかと思っていました。自分の
弱さをつくづく思い知らされ、この賛美歌が好きになりました。
た。

よわきものよ われにすべて
まかせよやと 主はのたもう
主によりて あがなわる
わが身の幸は みな主にあり。

(賛美歌 五一四)

主人の趣味（生き甲斐）

緒方 とみ子

（戸畑）

だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。
あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。

（マタイ六の二四）

私にも色々と趣味がありますが、時間や必要経費を、たっぷり使った覚えはありません。まして、それを生き甲斐と
思った事もなく、人の手を借りてまでした事も無いのです
が、主人と一緒に十二年、主人の趣味につくづく泣か
され、考えさせられました。時には、生き甲斐を持たないと
働かないと子供のような事を言う主人に振り回され、大きな
買い物をしました。ところが神様はよくご存じで、そんな主
人に悔い改めのチャンスくれたのだと、私は思いました。

一九九八・二・一〇、夕方一八時頃に主人は、会社の得意
先でケガをしました。近くにあった針金で手を縛り、車中で
痛いの一言も言わなかったと言う我慢強い主人に同僚は驚い
たそうです。鳥栖市の個人病院より久留米市の緊急病院へと
移され、かぼそい声で主人から電話を貰いましたが、どこを

どうしたものやら、いつも説明や言葉の足りない主人ですか
ら、たいしたケガだと思ってもみませんでした。

ところが、折り返しの電話の様に、「奥さんですか、手術
の説明をしますから急いで来て下さい」と看護婦からの電話
で驚きました。我が家はいつも火の車。ですから、当然余分
なお金がありません。戸畑教会へ行く時も、二時間前から起
きて、高速を使わず行くようになったのは、主人がタクシー
の仕事について頃からですから、どうしたものかと迷ってい
ました（祈って戴いていた伊規須先生から良い知恵を戴きま
した）。病院に着くと、主人はすでに手術室に入っていました。

主人は、朝が早く（当然、私も起こされる）夜も遅い仕事
ですから、かなり疲労も溜まっていました。おまけに昨年の
秋に誕生した子犬は、本部展でも通用するといわれ、随分と
北野緒方犬舎の名前が上がりましたが、私の正直な言葉に
よって、値打ちが下がり、売れませんでした。特優犬（九州
一）を育てたいと、常々言っていた主人にとっては、大きな恵
みでしたが、犬と仕事に頑張ろうと思っていた矢先ですか
ら、ショックだったと思います。

それに左利きの主人にとっては、左親指切断（主治医も
「職業を見て切断しました」と言う）ですから、犬はとて
も、これからは無理だと思ったそうです。入院中は痛みがあ

るので、とても静かな時を戴きましたが、内臓の病気ではないので、食事が足りずに、犬よりも面倒をかけ、私も随分と大変でした。

主人の短くなった親指は二二針、それは奇麗に縫っていました。聖マリア病院の手術をした先生と近所の個人病院長が先輩・後輩の関係で、思いもかけずに、通院後も良く診て戴きました。一年間は痛みが消えないそうです。主人は時々、内からの消毒だと言っては、お酒を飲んでいますが、二回に分けての抜糸も随分痛んだと思います。通院三カ月間、これからの自分を考える良い機会だったと思います。

犬の事にしても、親同士が賞歴を持つと言う「東鼻姫号」を与えられ、益々頭に昇らない様に多分に神様がチェックを入れて下さったのだと思います。

以前から私は、どこまですれば気が済むのだろうと思っていましたが、飼えば愛情も可愛さも湧きますし、なんとも言えなかったのですが、こうした機会（時）があらうなんて、思ってもみません。

それに、終わりになって、私達の思いよりも遥かに汚い世界も見させて貰いました。犬を取り巻く人間がいかに貪欲な動物であるかと言う事です。北野から誕生した犬が、いつのまにか、よその犬舎から出た様になっていて、主人は随分怒りました。それに、なにかにつけては金銭が絡んでいるのは

確かでした。私達が一生懸命育てても「徳優犬」はいつも犬屋か大金を出して上方から買って来た人ばかり取ってしまいい、素人にはとてもかかいませんし、裏では何をしているか分からない人達も多く居ます。（犬が喋らない限り分らない事です）

一九九八・三・二九、九州総支部展で優花号（幼稚犬Ⅱ生後六カ月以内）が、熊本支部展同様、二度も特別賞を貰ったのを最後に、私達は当分の生活費として、優花号を大阪のE犬舎に売りました。ところが、交配やアドバイスなどとしてくられて、長らくお世話になっていたY犬舎より随分怒られ、罵倒されましたが、主人は秋田犬を辞める気だったので、三年前にY犬舎より希望退職金で買った母犬を、やることにしました。

犬小屋が大きかったので、日が差さなかった部屋が久し振りに明るくなり、ホッと一息ついたのは私ですが、天国に行くまで主人の趣味は続く事でしょう。そして淋しくなつたのは当然です。

その分、今度は「孫を教会へ連れて行くのだ」と、張り切って息子に言ったそうです。すると、息子は「自分の子供を、クリスチャンにする」と言っていて、敬遠して連れて来ようとはせず、世の中うまくいきません。それで私達は犬の名に

もなった主人の好きな讚美歌六六番を、大きな声で歌います。

せいなる せいなる せいなるかなー初代のカナ



永遠の課題（十人十色）

緒方 とみ子

（戸畑）

「奥さん、どこへ行っても、勤まりませんね」と、主人は横にいた私を見て、ニヤリと笑った。昨年頃からの不景気な風は、私の町にも当然吹いている。我が家より一キロ位の所にあるM産業北野工場に勤めて、かれこれ一年になろうとしていた頃に仕事が切れ始めて、月の半分は仕事にならなかつた。平均四十五才前後の主婦達が家計を助けながら働いているパート業であるのだが、私を入社へと誘ってくれた彼女はとても有能な働き手でした。その彼女がこの事を理由として辞めればよいものを、先輩達のいじめによって働き場を失っ

たと言ひ出し、本当に残った私達は驚かされました。

それから随分と職場の雰囲気が変わりました。彼女は私の友人Yの友達ですから、性格すらあまり知りませんが、偶然にも主人は彼女のご主人と行きつけの散髪屋さんが一緒だという事で、家の様子がわかったのです。

気のついた奇麗好きな可愛い奥さんだという事でしたが、新聞やテレビなどいつも「いじめの問題」が最近賑わしていますし、私達も当然、心が騒ぎました。そしてそれが本当の彼女なのか、分らない程に、皆が彼女の批判をして問題になりました。私も彼女に対して批判しなければ、職場におられないようになり、気まずい思いでした。きつい仕事（足底が変形する程ミシンを踏む）にやっとな慣れ、人間関係にも問題がないと思っていた頃ですから、私も随分とショックでした。

彼女が辞めた後、さすがに仕事の軌道が違いましたし、批判した事が心重くなりました。それに、主人の仕事の関係で思うように仕事が出来ずに悩んでいた私は以前洋裁仲間だった友人Iに、この事を相談しました。するとタフな友人Iは「かけもちで、頑張りなさいよ」と工場の仕事と内職の仕事をするように教えてくれましたが、とてもきつくて二足のワラジは履けない事がわかりました。それで工場の仕事を辞めて、しばらく北野緒方犬舎の世話と内職をしたいと祈って

いました。

ところが、自分の思いと裏腹に、どうしてこのようになるのか本当にわかりませんが、内職をしていた店のデザイナーや裁断師の方々がどうしても店内の仕事を勧めるので、朝早くから出掛ける様になりました。暫くは、仕事がありました。が、不景気な風は久留米の店にも吹いていたのです。

おまけに、私は久留米で一番だという洋装店に勤めていた経験があり、その事がマイナスになろうとは思っていませんでした。私は新しく出直す積もりで頑張っているのに、なにかにつけては前店の事を持ち出し批判します。それだけなら我慢もできましたが、「下手くそな緒方さんにやる仕事がない」とまで言われ、がっかりしました。これまで祈っているだけに、神様はどうして私に追い詰めた事をなさるのだろうーこれから先どうすれば良いのだろうと、思いました。

なにかにつけて躓いている私は主人よりよく「生意気だ」と言われたり、自分では気が付かない事ですが、「一言多すぎる」と言われたり、祈りの足りなさをつくづく感じます。そしていつも逃げ出したくなる情けない者ですが、そんな時、お言葉を思い出し、救われるのです。そして大きな方が、何時もいる事に感謝します。

心おののく者に言え、「強くあれ、恐れてはならない。

見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、神の報いをもってこられる。神は来て、あなたがたを救われる」と。

(イザヤ書 三五の四)

私は今、新しい道(転職)を見つけ、望みをもって、S 株で働いています。その道は延反(反物を延ばす)と言い、まさに五十の手習いです。感謝!

一九九八・四・一一(土)



夫婦ゲンカ仲直り法

緒方 とみ子

(戸畑)

子供のいない我が家では、そんなに大きなケンカはしたことが、ありませんが、いつも仲を取りもってくれるのは、愛犬です。

ささいな事で、言い合いになり、自分が不利になると、主人は直ぐに助けを求めて駆け寄り、なにか言っていますが、犬にとっては大変迷惑な事です。

しかし、おかしいもので、私も、主人のいない時は主人の悪口を、犬に言っているのですから、似た者同士です。

犬語が、あったらどちらに、応援してくれるかと、主人に聞いたら、餌をやる私だと言いますから、面白いものです。

でも確かに犬は、耳を傾けて聞いている時があります。名前を呼ぶと、耳をピクピクさせたり、振り返ったりします。で、私達よりも賢い動物かもしれません。その点、私達は犬の吠え方や動作で状態がわかりませんから、愚かな者です。それに、犬に教えられる事もあります。

秋田犬を飼って七年になる我が家ですが、素晴らしい(九州一)犬作りにいつも挑戦していますので、勿論ささいな事

は犬の育て方なのです。

平成九年九月九日(火)

(注)これは西日本新聞の「絵皿」というコーナーに応募したときの文章です。いつもこの短いコーナーを読むたびに、皆さんの書かれた事柄に感動し、私も書いてみました。やはり金言ほど、的を得ている言葉はないと、いつも思います。そして心に残ったのが、テレホン聖書の御言葉でした。

背信の子供たちよ、帰れ。

わたしはあなたがたの背信をいやす。

(エレミヤ書 三章二二節)



八幡前田教会年表

教会創立五十周年誌『ぶどうの木』が発行され、八年になります。そこでその後の教会の歴史をまとめましたので、ご覧ください。

一九九〇年

『あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。』
(出エジプト二〇・三)

『父がわたしを愛されたように、わたしもあなたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。』

(ヨハネ一五・九)

『イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも変わることがない。』
(ヘブル一三・八)

一月一〜三日 新年聖会：新年礼拝を榎本師が御用さ

れ、聖会は榎本和義師が御用されました。

五月一三日 洗礼式(於：大蔵川)

受洗者 (八幡前田) 林 一孝兄

(戸畑) 緒方昌隆兄、

内田松枝姉、瀬尾節子姉

五月二九〜三〇日 婦人会研修旅行(於：湯布院)

六月三〇日 創立五十周年誌『燃ゆる柴』発行

八月六〜七日 日曜学校一泊夏期学校(於：教会)

八月九〜十一日 中高生サマーキャンプ(於：英彦山)

一〇月一二日 海江田道夫兄告別式(十一日召天)

十一月二日 上田省三兄、張紅霞姉結婚式

十一月二五日 年末感謝会

十二月二三日 クリスマス礼拝、祝会

十二月二四日 燭火礼拝(キャンドルライトサービス)

一九九一年

『わが義人は、信仰によって生きる。』

(ヘブル一〇・三八)

『御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。』
(第一ヨハネ一・七)

『すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち神の子である。』
(ローマ八・一四)

一月一〜三日 新年聖会

一月五日 榎本百合子夫人入院(三月八日退院)

一月三〇日 榎本利三郎師入院(二月退院)

四月一日 正野サカエ姉告別式(三月三〇日召天)

四月二五日 高橋フジエ姉告別式（四月二四日召天）

四月二七日 山本明彦兄、河本潔子姉結婚式

（喪ヒルトンホテル）

五月六日 洗礼式（於：大蔵川）

受洗者：大田敏夫兄、相浦裕二兄、

門司澄子姉、木元愛子姉、

津留崎晏子姉、高木静枝姉

六月三〇日 鈴木美保姉告別式

（於：自宅、二八日召天）

八月一〇日 中山一朗兄、木原佳子姉結婚式

八月二二、二三日 日曜学校一泊夏期学校（於：教会）

九月一日 野村末義兄告別式（九日召天）

九月二三日 戸畑教会会堂落成感謝会

一二月一五日 年末感謝会

一二月二二日 クリスマス礼拝、祝会

一二月二四日 燭火礼拝（キャンドルライトサービス）

一九九二年

『信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。』

（ヘブル一・六）

『主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。』

（ヨハネ第一 三・一六）

『わたしたちは、すでに神の子なのである。』

（ヨハネ第一 三・一）

一月一、三日 新年聖会

三月六日 石井進兄告別式

三月三〇日 水村光義兄、山田美佐子姉結婚式

四月四日 榎本利三郎師入院

（四月二〇日退院）

五月一〇日 墓前礼拝・納骨式（光成勉兄）

（於：東郷納骨堂）

六月一四日 求道者会（若葉会）開始（礼拝後）

六月三〇日 大阪集会再開（月一回）

七月一日 中川智尚兄・河本恵姉結婚式

八月五日 春の町家庭集会開始

八月一日 日曜学校一日夏期学校（於：教会）

一〇月四日 墓前礼拝・納骨式（正野サカエ姉）

（於：東郷納骨堂）

一〇月一七日 高橋英司兄・寺島佳織姉結婚式

一二月六日 年末感謝会

一二月一七日 篠原正則兄・小田登代子姉結婚式

一二月二〇日 クリスマス礼拝、祝会、キャロル

一二月二四日 燭火礼拝(キャンドルライトサービス)

一二月二四日 燭火礼拝(キャンドルライトサービス)

一九九三年

一九九四年

『見よ、わたしは主である』 (エレミヤ三二・二七)

『わたしに呼び求めよ、』 (エレミヤ三三・三三)

『わたしの愛のうちにいなさい。』 (ヨハネ一五・九)

『主は王とられた、世界は堅く立って、動かされることはない。』 (詩篇九六篇一〇節)

『主を恐れる者よ、主に信頼せよ。主は彼らの助け、また彼らの盾である。』 (詩篇一一五篇一一節)

一月一〜三日 新年聖会

三月 『ぶどうの木』第一九号・『神は愛なり』 (正野サカエ姉記念誌) 発行

(受洗者 上田喜美代姉、緒方三展姉、

『わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。』 (コリント第二四章一八節)

五月三日 洗礼式(於:大蔵川)

受洗者 榎本泉姉、小田信子姉、

一月一〜三日 新年聖会

墓前礼拝(於:東郷納骨堂)

一月一六日 成人祝福式(渡慶次政宏兄、植木亜矢姉)

五月二三日 日曜学校一日夏期学校(於:教会)

五月一七日 榎木すみ子姉告別式(一六日召天)

八月一六日 洗礼式(於:教会)

八月一五日 日曜学校一日夏期学校(於:教会)

九月一二日 受洗者 山口琴江姉

九月二五日 児童祝福式(神野泰生くん)

一〇月二七日 島山正三兄召天

一〇月二日 墓前礼拝・納骨式(榎木すみ子姉)

一〇月三〇日 中島君子姉召天

一〇月 、『ぶどうの木』二二号発行

一一月 『ぶどうの木』第二〇号発行

一一月一三日 幼児祝福式

一一月一九日 クリスマス礼拝、年末感謝会

一一月七日 井上げさの姉告別式

一二月二三日 クリスマス祝会、キャロル

一二月一日 年末感謝会 (於:自宅・五日召天)

二月二三日 キャロル

二月二四日 燭火礼拝（キャンドルライトサービス）

二月二五日 クリスマス礼拝、祝会

二月三〇日 三好喜代市兄告別式（二八日召天）

一九九五年

『あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。』（ヨハネ一四章一節）

『永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわぎを取り除き、生ける神に仕える者としなさいであろうか。』（ヘブル九章一四節）
『主を喜ぶことはあなたがたの力です。』（ネヘミヤ八章一〇節）

一月一〜三日 新年聖会

二月六日 高木敏夫兄告別式（二月四日召天）

五月三日 洗礼式

受洗者：石井勝三郎兄、石井二三子姉

五月七日 墓前礼拝・納骨式

八月七日 日曜学校一日夏期学校（於：教会）

九月一五日 焼山恭克兄・榎本泉姉結婚式

（於：五香教会）

一〇月一五日 墓前礼拝

二月 『ぶどうの木』特別号、第二十二号発行

二月一〇日 年末感謝会

二月二三日 キャロル

二月二四日 クリスマス礼拝、祝会

一九九六年

『わたしは神である、今より後わたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。』

（イザヤ四三章一三節）
『わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう。』
（イザヤ四三章一三節）
『御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。』
（ヨハネ第一一章七節）

一月一〜三日 新年聖会

三月一〇日 石丸到兄・来仙淳子姉結婚式

三月二三日 海江田正憲兄告別式（二二日召天）

四月二八日 榎本牧師米寿感謝会

五月六日 洗礼式（於：大蔵川）

受洗者：西山公治兄、正野のぞみ姉

八月二日 日曜学校一日夏期学校（於：教会）

八月 『ぶどうの木』第二三号発行

一〇月四日 墓前礼拝

一二月一日 年末感謝会

一二月二日 クリスマス礼拝、祝会

一二月二四日 燭火夕拝（キャンドルライトサービス）

七月二三日 大長光裕輔兄・国分恵子姉結婚式

七月 『ぶどうの木』第二十四号発行

八月二日 夏期ファミリィ・キャンプ（於：教会）

一二月七日 年末感謝会

一二月二一日 クリスマス礼拝、祝会

一二月二四日 燭火礼拝（キャンドルライトサービス）

一九九七年

『わが義人は、信仰によって生きる。』

（ヘブル一〇章三八節）

『聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」と言うことができない。』（コリント第一 一二章三節）

『聖霊を受けよ。』（ヨハネ二〇章二三節）

一月一〜三日 新年聖会

三月二〇日 納骨堂移転

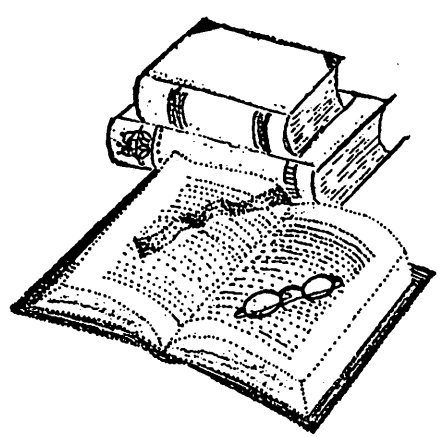
四月六日 金生伝道師任命式・感謝会

四月二二日 小森谷正義兄召天

五月六日 早天祈禱会開始

五月一九日 洗礼式

受洗者：榎木さなみ姉、新谷千恵子姉





1998年1月2日 八幡前田教会(1)



1998年1月2日 八幡前田教会(2)



1998年1月2日 八幡前田教会(3)



1998年1月18日 福岡大濠公園教会